
クラゲと、空と青空と。

だるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラゲと、空と青空と。

【Nコード】

N3219C

【作者名】

だるま

【あらすじ】

私と里奈と里奈のままと鈴、壊れないと思ってた。ずっと。

1 話（前書き）

軽いグロテスクな表現もあるかも？

まだ書いている途中なので出すか

ワカリマセンが、、

もし出たらのために。。。

誤字脱字には目をつぶって読んでください。。。w

1話

中学の時から私は、どこかお荷物的な存在だった。

どうしてだったかはあまり覚えていない。

ただ両親からのプレッシャーだけが募っていた。

私は、いい学校へ入ってそれからもいい子で居なくてはいけないことが辛かった。

地域で一番の高校へ進むのが良くて、

他のレベルの低い場所に行ってはいけないと、もう小学校から教え込まれていた。

正直勉強が出来る弟と私への親の接し方の差は激しい。

私より弟の方が、勉強が出来ていい子だ。

そして私には、お姉ちゃんだから、そう言う。

ゲームやネットをすると後ろで見張られる、止めて欲しいなら言え
ばいいのに。

弟は、まだ子供だから、テストが良かったからご褒美だと言われ、
ゲームをしている。

高校に入って、私は誰ともしやべらなかった。面倒だった。
何かやる気を失っていた。

本当は叫びだしたかった、限界だった。

高校に入って、私はただ社会を循環する単なる一員で、
さらには個性、個性といっている大人が求めるのはいい子の複製で
しかない。

そして、学校にいる連中全てがコピーでしかない事に気がついてい
た、

私生活面で限界だった私は学校でもぼーっとしていることが多くな

り、
ついでに人の話を聞き忘れていることも多くなった。
それが仇となつてかウザイ女子どもがノリが悪いと人の噂をして
いた。

私は正直ただの一部それも、
コピーのような個性1つない、
流行だけの彼らとしゃべる必要性を失っていたのかもしれない。

私はなんだかもうどうでもよくなっていた。
きっと今私の中は、授業で聞いた環境問題のような状態なのだろう。
しかし、こんな私は絶対おかしい五月病かなにかだろ。
馬鹿な頭を捻るがそれしか今まで生きて来てみて考えだせない。

ウザイ噂を立ててくれている学校の連中とは遊びたくもない、
でも救世主が自分にはついていてるのだ。
学校は違うけど私には里香^{リカ}という親友がいた。
私のラッキーカードと言うべき里香は別の学校へ進学していた。

私の親は里香と遊んでいたから、
成績が落ちてチャラチャラしたんだと思っているらしい
中学校時代、度々学校へ来ては里香を見つけて嫌味を言つてのける
愚かな私の親にめげず仲良くしてくれた。
高校に入っても帰り、里香と買い物へ出かけたりゲーセンやカラオ
ケに行った。

お金がある時だけのお決まりコースだ。
お金がない事とばれない程度に調子にのって万引きもしたこともあ
った、

高校生になつてから里香と2人夜中に遊ぶことも多くなった。

最近に至っては、

お金が欲しくて歳を誤魔化してコンパニオンをやったりした、結構ばれないものだ。

ばれていたのかも知れないけど、そんな事はどうでもいい。ただし、それが出来るのは親が眠った後抜け出してからの事なのか。

仲良しこよしの私達はお互いの事を本名で呼び合わなかった。

私は親が決めた名前なんて本当にもううんざりだったんだ、家で呼ばれている嫌な名前です大事に友達に里香には呼んで欲しくなかったのだ、

里香はそれに付き合ってくれる良い奴だ。

私は愛名^{アイナ}で里香^{リナ}は里奈、遊ぶときは名前を変えていた。

そうでなければ私はやり切れない思いで一杯だっただろう。

私達はここ数週間、里香の彼氏のトモダチとか言う男子と里奈の彼氏の4人で遊んでいた。

里奈の彼氏のトモダチは鈴^{リン}ちゃんとかいう超女の名前なのに本人は男だ。

初めて会って名前を聞いたときオカマかゲイだと思ったが、どうやら違っらしい。

私が思うにそれも怪しいところだ。

まあ名前は、うちらみたいな偽名かなんかだろう、

通常に考えても鈴なんて名前の男は居ない絶対。

本名をいちいち聞くのは面倒臭いのだ、

その時遊びで呼ぶ名前があれば良いのだ。

だんだんと仲良くなっていた私達は困ったことがあったら3人で解決方法を模索し、

ウザイ事があつたら愚痴ったりして3人で遊んだり話した。

里奈の彼氏は鈴とつるんでいる事がかなり気にならないらしく、遊ぶなど言っでは喧嘩になり殴るらしい、

自分が友達だと紹介しておいて意味が分からない。

鈴が加わってからもお決まりコースは変わらずカラオケ、ゲーセンのお決まりコース、でも楽しかった。

1 話（後書き）

お楽しみいただけることを願っています。
読んでくれた方ありがとうございます！

2話 TATTOO（前書き）

誤字脱字もある可能性が、
なのでそういうのを見つけたら突っ込まないで
目を瞑りつつ読んでくださいね

2話 T A T T O O

カラオケで飲んで勢いで鈴と寝たことがあった。

里奈は知らないし私は言えないだろう。

何故なら里奈も鈴がゲイだと思っているからだ。

私の中で超トップシークレットだ。

起きたらラブホのベットで、隣にはゲイと疑っていた鈴、、

それにも驚いたが鈴と寝たことはもっともつと驚きだ。

幸いゴムはしていたらしい。

しかしながら不思議なことに恋愛感情は0%。

男性に見れなかった、でも鈴は男だ。

自分でもよく分からない感情だと思う。

男女に友情はないというけど私達にはあった、

そう私は勝手に思っている。

思ってるけど核心している。

理屈で言い表すことが出来るほど私は頭がよくない。

ラブホで気づいたのだが、鈴は多分私達と同じ年齢くらいなのに、肩にかけて背中の中の3分の1にT A T T O Oを入れてた。

中心には首だけになった真っ黒な犬が血を垂らしながら大きく牙をむくデザインだった。

何でT A T T O Oを入れたかは教えてくれなかった。

「かつこいいなあ私も入れようかな、どこで入れたの？」

そう聞くと鈴は軽く笑って言った。

「入れないほうがいいよ。ケア大変し、まだ高校生ジャン」

私は子供扱いされた気がしたイラついたけど、
だらだらしているうちに忘れていた。

今更ながらベットで見ると鈴は意外とカッコイイ感じだ。
あんな女の名前なのに、

私は軽く嫉妬のような複雑な気持ちに襲われた。

だが実際カッコイイだとか男だっと思ったこともなかった。
多分、一緒にいすぎたのか感覚が麻痺していたのかもしれない。

2話 TATTOO（後書き）

またまた読んでいただいております！

3 話睨み（前書き）

誤字脱字には目をつぶって読んでください汗汗

3 話睨み

それから3日後、鈴とほかの子達と遊んでいるときに、里香が赤い目でやって来た。

さつき彼氏と別れたらしい、目は泣いただけじゃなかった。

軽い青あざが左目の上辺りにあった。

周りの空気がヒヤリと冷たくなった。

誰でも見ればすぐに殴った後だと分かった、里奈の彼氏は最低だ。

「里奈、あいつ糞だ！、殴る奴なんて最悪。」

ム力つきに耐え切れずに私が言うのと里奈は笑って

「別れて正解だったよ、すぐ殴るし殴れば言うことを聞くと思ってるんだよ。」

前から別れようと思ってたんだ。でも殴られるのがいやで切り出せなかったただけなんだよ、別れて清々した。心配してくれて愛名アリガト。」

里奈の元彼氏が鈴の友達だった事もあってム力つきを鈴にぶつけた。私は鈴を睨みつけた。

「お前のトモダチ最悪だ！」

「友達なんだろう。知ってたんじゃないのか？里奈を殴ってたとか知ってたんじゃないのかよ、止めるとかなんか出来なかったのかよ。」

私はとにかく鈴を責めた、理由はいうまでもない里奈のことだ。

鈴はただひたすら黙っていた、そんな鈴に私はもつと腹が立っていた。

「はつきりしろよ、知ってたんだろ。」

なんで里奈のこと助けなかったんだよ。聞いてんのかよ」

「聞いてるよ。」

鈴はタバコに火をつけながら言った。

チェリーが入ったタバコが甘く煙が香った。

「DVしてんのは正直知らなかった。」

普通の恋愛だと思ってたから何処まで口出しすれば言いか分からなかった。

里奈とあのあいつとの恋愛だと思ったんだ・・・」

そう言葉を濁していた。

少し暗く鈴が喋った後は、重暗い沈黙だった。

空気が重い、

誰もしゃべらない暗い雰囲気はもつと気分を暗くさせ、空気をさらに重くしていく。

結局沈黙を破ったのは里奈だった。

「暗いよ皆、何人の恋愛の話でヒートしてんの？」

もう終わっちゃたって。終わったんだから愛も鈴ちゃんも喧嘩しないでよ。もう。」

里奈は笑って漫画みたいに左右に手を上げて馬鹿馬鹿しそうにした。それは無理をしているのが見え見えだった。

冷たくなった空気が重かったらしく他の奴らが消え、
最後に私たちも解散した。

あのまま遊んでいてもギクシャクするのは見えていたことだったから。

それから3日間鈴と連絡は取らなかった、
基怖くて取れなかった。

でも里奈とは学校帰りに遊んだ、

お金がないからコンビニやファミレスで話すだけだったけど。

3 話睨み（後書き）

読んでくれてありがとうございます

4話タブー？（前書き）

見直したつもりですが

誤字脱字には目をつぶって読んでください汗

4話タブー？

公園で里奈と一緒にいた時に、鈴からメールが来た。

一言「遊ぼうv(^ ^)」と書いてあった、

暢気なメールの絵文字だ。

私は3日前の事を気にしなかった訳じゃない、

でもゴチャゴチャするのはもう面倒だったから

「うん、ドコデ？(？ @ ？)」と返信をした。

(言っただが私はギャル語に正直ついて行けなくて、
携帯に元々入っている物も滅多に使わなかった。)

私たちは何処に行くわけでもなく結局鈴が公園に来た。

心の中では遊べるゲーセンとかカラオケとかおごりで期待してたんだけど、

それよりも鈴がこの前の事を気にしていないようで、

私はなんだかそのマイペースさが可笑しくもありとてもホツとし、

ニワトリのようにコロツと忘れてしまうような鈴にムカついた。

でも他人に嫌われるのは凄く怖かった。

ギクシャクするのはごめんだ。

その後公園で私達はたわいのない話で盛り上がった。

誰がムカつくとか学校であつた話とかいろいろいるだ。

中でも里奈の話す学校の話と友達の話は楽しかった。

話すネタが尽きない。

でも、家の話はこのメンバーでも話さない、何故かいつもそうだった。

誰かが話すときはその話題を振られないようにしたり、
振られる前に帰ってた。

3人でほとんど遊ぶようになってから、
いつの間にか家の話題は一切しなくなった。

家族構成から何から喋ることもなかった。

しゃべっていると時間が経つのは早いもので、夕方だった。

夏が近くても夕方になれば寒くも少しはなる、

それにさすがに話しや場所に飽きる。

そんな中で里奈がいきなり意外な事を言い放った

「寒いし、今私の家誰も嫌な事言わないと思うから家きなよ」

3人の黙認を破ったのは里奈だった。

なんとなく黙認黙秘の沈黙を破られた私と鈴はビックリして後で、
里奈に見えないように顔を見合わせた。

鈴の顔は今にもマジかよと言いたげだった。

きつと鈴に見える私の顔も同じ顔をしていただろう。

本気で驚いた、超ビックリだ。

4話タブー？（後書き）

ココまで読んでくださってありがとうございます！！！！

5話 里奈のママ（前書き）

見直しをしたつもりですがもしかしたら
誤字脱字があるかも？

その時は突っ込まずに見逃してやってください

5話 里奈のママ

里奈の家は団地の超ボロボロの家だった。

玄関の目の前は角の取っていない石がひきつめてある駐車場だった。周りの家も同じ感じ。

築何年なのか分からないけど、外観は本気ボロイ。

白かっただろう外観は黒ずんでいる。

チャームは壊れているらしくガムテープが貼っており、中に入ったら玄関に靴が散乱、置く場所がないし埃が溜まっていた。

私と鈴が靴の置き場に困っていると、

里奈はほかと比べて汚い靴の上に置けと言ってきた。

どの靴の上に置いていいのか分からなかったなので、再度指示を里奈に仰ぐと片隅にあった靴の上に置けばいいと言ってきた。

確かに、言われた場所に埃が被っていて、

かなり昔から履いていないと思われるスニーカーがあったので、その上に置いた。

里奈の部屋は入ってすぐにある左のドアの中だった。

私の部屋よりは小さいけど家の外観と違い普通の部屋だ。

本当に普通の女の子の部屋で、ぬいぐるみと写真、ポスターがある。

私達はとりあえずタバコを吸って、

里奈の持ってきたジュースを飲みながら突然くることになった里奈の家の話を話し始めた。

鈴が開口一番喋った言葉がこれ

「俺、里奈の部屋はじめて来た。普通〴〵の部屋じゃん。」

里奈は当たり前だっつーのと言う顔を喋った。

「どんな部屋だと思ってたんだよ、普通に決まってるよ。」
それがおかしくて私も里奈に喋りかけていた。

「結構綺麗にしてんジャン、もっと汚いと思ってた。」

里奈は顔を河豚みたいに膨らませて言った。

「愛名まで言うかな」

そうして私達は笑った。

タバコが充満した部屋の窓を開けながら、
鈴のタバコは変な香だとか、くだらない話をしていた。

里奈の家に来て私も鈴は自分の家と比べる話や
どんな場所にあるか等の話を出来なかった。

私は自分のことを話すのが苦痛だった。

そしてその時の私は里奈や鈴に嫌われたくない一心で家や家族のこと
とも話せなかった。

里奈の部屋でゲームをやったりして時間を必死につぶしていた。
その時、私はとにかく家に帰りたくなかったのだ。

8時になって里奈のママが帰ってきた。

ちよつと里奈の部屋を開けた里奈のママは
スーパーに行ってきた様子で片手に大きな袋を抱えていた。

「あら、里香の友達？珍しいわね。」
里奈が少し照れたようにして

「いいじゃん別に、もうドア閉めてよ」

里奈のママは笑って

「こんばんわ。ゆっくりしてってね」

そう言っただアを閉めた。

普通の親なら部屋がタバコの煙充滿していたら、

それも学生服を着た子も一緒なだけで学校に報告、

もし報告しなくともその場で他人でも説教だ。

それも娘とタバコを吸っているような連中なのに笑ってコンバンワだ。

里奈のママは結構神経が図太いのかも知れないと私は出会って思った。

6話 もう

その後、暗くなるけど親に連絡はいいの？と里奈のママは心配してくれた。

「家は大丈夫です。保護者と同居してないんで。」

そう言い放った鈴の言葉に私は内心すごく動揺した。

「私も、親とは一緒だけど心配なんてしませんから。」

そついうと里奈のママはご飯の用意をはじめた。

簡単なものだけしかないけどと言ってご飯を出してくれた
里奈のママはやさしい人だと思った。

私の家じゃ、私に食事なんて出てこない。

食べれるのは両親と弟だけだ。

私とは絶対食べない家族、

それと違って他人にもご飯を用意して優しそうな里奈のママが羨ましかった。

そんな里奈が妬ましくもあった。

里奈のママは食事中にいろんな話をした、

離婚やお金が無い話、パートをしている話。

里奈のママはどんな事でも笑って話してくれた、

そんな里奈ママの隣では鈴が嬉しそうにご飯をかきこんでいた。

「和風で夕飯とかひさしぶり、いつもコンビニでパンとかだもん。」

ふと見た、滅茶苦茶うれしそうな鈴のお箸の持ち方は変だった。お箸の持ち方を知らない幼稚園の子供が握ってるだけに非常に近いような持ち方で、

いつの間にか里奈のママからお箸の持ち方のレクチャーを受けていた。

必死にお箸を持って動かしている鈴の姿が面白かった。

そういえば、誰かと普通の食事を家で取るのは中学入学以来だ。

レストランやマックで食べたりする以外、

家でゆつくり楽しく話したり、食べたことがなかったから私はとてもうれしかった。

こういう家族なら良いのにと私は強く思った。

私が幸せに感じる時間はすぐに過ぎてしまう。

着替えもなければ約束もしていないのに里奈の家に泊まるわけにも行かない。

しぶしぶだが、家に帰ることにした。

気分は天国から地獄の底だ。

私の家は里奈の家から電車で1駅違う。

駅から遠くて徒歩20分掛かる、だからチャリに乗って家に帰る。

でも最近はそのがイヤだ、

チャリに乗ったら早く家についてしまう、

出来るだけ家族に会いたくなかった1人でいたかった。

家に帰ることが嫌で仕方がない。

そんなことを言っても大人は若い時はそう思うものだと言っ合ってくれないのだ。

大人は信じられない、

心ではお金や見た目、学歴しか見ていないくせに人は心だと言いの

さばってくる。

心なんてない癖に大嫌いだ。

6話 もう（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます
誤字脱字が在ったかもしれないが
突っ込まずにいてやってください^^;

7 話 深海。

私の親が必死で買ったらしい
一戸建てに帰るのは本当にもうウンザリだった。

それでも私にはこの家しか帰る場所が存在しないのだ。
夜中の世界は私には優し過ぎた。
家族の居ない場所に逃げてこれるのだからだ。
家に居る奴らに知られない様に、
ドアをカチャリと出来るだけ音のしないように開けた。

普段は仁王立ちで偉そうに玄関前に居るのだが今日は居なくて超ラ
ツキーだと思った。
さっさと玄関の目の前にある階段を上ろうとしている時にやってき
た父に見つかった。

「何処に行っていたんだ。」

お帰りのひとつの言葉もないものかと思いつつも、
毎回聞ける言葉もお決まりコースだ。

「徳は中学受験が近いんだ。」

お前がチャラチャラして遅く帰ってきたら徳に悪影響だろう。
長女なんだからシツカリしてもらわなくては困る。」

つまらない徳ちゃんの心配話かよ、
うぜえ、内心私は毒づいた。

私は無視して階段を上っていいこうとした。

その時、いきなり腕を引っ張られ後ろ向きにこけた。
文句を言おうと思ったら、足で腹を蹴り上げられた。
その後は蹴りだけじゃなくて、
殴りも加わって最後に顔を叩かれ睨と証した親のストレス発散は終わった。

糞ジジイは

「お前は社会の屑だ」

そっぴい捨ててリビングに向かって歩いていった。

リビングでは楽しそうな糞ババアとジジイと可愛い可愛い徳ちゃんノボルが
「あいつ」は困った奴だと話している。

勝手に言えはいいさ、お前らには分からないだろう。

落ちこぼれの私の気持ちなんて。

さっさと階段を上って自分の部屋に入る。

入ったところで、私の部屋に鍵はない、

何をしてしているか分からないと言われ、取り外されているのだが。

でも、まだドアがあるだけマシだ。

いきなり入ってこれても日常茶飯事でもう何も言っ気になれない。

違う・・・きつと、

言っ気になれないのではなくて、暴力が怖いのだ。

殴られるのは嫌だから彼らには何も言うこともしない。

私はくらげのように半透明の存在で、ふらふら漂っている。

可笑しい話だがこの家では、

私をもつ意見も何もかも自分の意思でもないのだ。

ただゆらゆら漂うくらげの私は、
魚や流れてくる枝に引っかかり簡単に破れてしまうのだ。
漂う私に居場所はないのだ。それは、ある意味で外でも同じなのに。
私はかすかに思うことがある。

7 話深海。（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

結構長くなる予定ですがお付き合い頂けたら幸いです！

8話 しんかい

このままではイケナイということ、
そして変わらなくてはいけないことを感じている。

でも、今を変えるが出来ないことも知っているのだ。
私の心はただ漠然としている。

ひたすら腐っている私は、
いつか壊れていくのだろうそう思った。

さっさと寝よう。

時間は動かなければすぐに過ぎていくのだから。

朝、鈴からの電話で目が覚めた。

いつもと変わらずに、鈴は遊ぼうと言ってくる。

鈴らしい発言だが、この家の中で聞ける鈴の声は暖かく感じる事が出来た。

「愛ちゃん暇だから遊ぼう、つうか里奈の家いこーよ」

「里奈は良いて言ったの？」

「ぜんぜんOK牧場だって、マジでウケる」

約束を取り付けた。

「じゃあ、10時に駅前だね。遅刻無しだぞ鈴」

ハイハイと鈴の返事が聞こえる。

私はとにかく早く家から離れたい一心だ。

鈴と里奈という時だけ、

私の心はくらげじゃなくなっているように感じる。

部屋から出て玄関に逃げようとすると、母が来た。

「あんた、何処行くの。」

またあの里香とか言う不良の馬鹿のところ

これ以上馬鹿と付き合わないでほしいわ、

徳に悪影響があつたらどうするの。徳は受験なのよ」

私は何も答えなかった。もううんざりだ。

この前寄ったペットショップでくらげの入った水槽を見つめていた時に、

「くらげは物を言わない、何も分からない。でも本能で感じる事が出来る」

とペットショップの店員は言っていた、

私と同じだと思った。

本能でもう彼ら（家族）を嫌っているのだ。

何も答えずに出て行こうとした。

「あんたがいると徳に悪影響だわ、、、
産まなきゃ良かった。何で産んだのかしら・・・」

ため息の含まれた声が私の耳に侵入してきた、

勝手に産んだのはお前の癖に、

私だって好きこのんで生まれたわけじゃないのに。

体が炎に包まれたように、熱くなるのが私には分かった。

大きくドアを開けて走って家から離れた、走って走って走りまくった。

駅につく頃には息が上がって呼吸が出来なくなっていた。

もう、目から出て来そうな涙という塩水が海の底に私を突き落とし、ていくように感じた。

本当、私には何一つ残っていないように思えた。

8話 しんかい（後書き）

またまた読んでくれてありがとうございます！

9 話安堵。

海の深海のように、全てが真っ暗で見えなかった。

走ってきたおかげで、予定時間より10分早くついた。

誰もいない待合場所で待つのはかなり、

辛かった。

五月蠅い待合室に辛さを感じ、

誰か早くこの海の底から救い上げてほしいと強く願った。

それに反して鈴は遅く着いた、

鈴は待合室の椅子に蹲つずくまり、

動かない私を心配してくれた。

「どうした、なんかあったの。」

それだけでも、なんだか十分に嬉しく感じる事ができた。

私の顔からは深海に居たせいで、

大粒の塩水が浸水していたのだ。

鈴はさらに驚いて居たようだ、

今度は元気付けようとしてくれた。

「そんなに泣いてたらばっちりメイクもボロ落ちだよ、
里奈の家行こうぜ。」

少しあせった様子で私の手を引いて電車に乗った。

電車の中でも手を繋いでいて傍目から見たら、

カップルだと思われるだろうしかも喧嘩後。

しかしながら鈴へそんな感情はない。

でも久々に友達だと感じる事が出来て嬉しかった。

里奈の家に少し迷い2人でこっちだ、

あつちだと方向音痴振りを披露している内に大体の事は忘れられた。

里奈の家に着いた頃はやつと着いたぜと鈴は言い、

なんだか私はぼんやりした嬉しさを感じた。

里奈の家は私にはとても暖かい場所を感じた。

里奈は部屋が片付いていないらしく締め出され、

今日は居間に居る事になった。

何故か夏が近いのにコタツが片付けられていない。

鈴は不思議だあ〜と言いながら冷たいコタツに足を滑り込ませていた。

パートから帰ってきた里奈のママも一緒に楽しい話をしながら、

途中でお昼の食事を出してくれた。

暖かい食事が素直に嬉しく思った、

手間は一切掛かっていないおかずはスーパーで買って来たらしい、
漬物とサラダに食後のプリンだった。

私の周りには喋り楽しむ事が出来る人達。

それだけの食事と団欒だけでも、十分私を楽しませてくれた。

このままで十分な幸せだ、

これ以上は要らないし、

これ以下の普段の生活も嫌だと思った。

今が永遠に続いて、

この生活だけをただひたすら続ける事が出来たならば、
きっと私は全てから変れる事を確信できた。

里奈のママとゲームをした、ゲームは格闘技だ。

鈴が持ってきたらしいがキャラが全員美女のみ・・・

キャラに野郎は1人も居なかった。

9 話安堵。（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
誤字脱字は見逃してやってください^^；

10話止ってくれば

里奈と私で「案外鈴オタツキーだったんだ」と言って笑った。里奈のママはそれを聞くとたしなめると同時に意気込みを語っていた。

「まあ、まあ、そんな笑わないのよ。さあゲームしましょう。負けないわよ」

第一の対戦相手である鈴はボロ負けしていた。

意気込みを語った里奈のママが勝者を飾ったのだ。

鈴はめげずに3回も挑戦を申し込んで結果は1勝2敗。

ゲームを持ってきたはずの鈴が負けるとは、

奴は何をしていたんだろう……。そんな鈴を見て里奈は爆笑していた。

遊んでいる途中に私はいつの間にか眠っていた。

だらだらした夢の中で私は殺人者で、

警察の人が電車に乗って刑務所に連れて行く話だった。

電車の乗り継ぎを待っているときに私は中年のおばさんにあった。

彼女は私のことは知らない様子だった。

私はジュースを買いに自動販売機に向かい、

おばさんは電車が来ないので自動販売機のあたりまで様子を見に来たようだった。

彼女とは何も知らないのに電車が来る少しまで話をして
。。チャンと呼ぶようになっていた。

私は始めて友達が出来たと思った。

その後電車が来た、

警察の人に私は死刑になるんですかと聞いた、
すると警察の人はそうだろう。

と返ってきてその人とはもう話はしなかった。

その中の私は、何故か死刑を怖がることをしなかった。
名残惜しいと思ったのは、

その中年のおばさんともう話せないと感じた事だけだった。

きっと私がもしも現実でこういう立場になったら、

こんな感情になるのかも知れないと夢が覚める中でぼんやり思った。

起きても鈴が格ゲーをしていた。

まだしてるのか、このアホはと思ったけど、

負けて悔しがる鈴の顔は面白かった。

悔しがる鈴のお腹がぐーぐー言いはじめていた。

私達は、少し置いて笑いあった。

鈴は少し恥ずかしそうだ。

里奈ママは冷凍の肉まんをレンジで解凍して鈴に渡した。

「食べないと駄目よ」

やさしい笑顔だった。

キレイだと思うけど、悲しいとも思った。

10話止つてくれれば(後書き)

誤字脱字があるかもしれませんがソコには目をつぶって読んでください汗

そして読んでくださってありがとうございます！

11話だた歩く

肉まんを食べる鈴が声を出した

「あーちゃんいびきかいてた〜」

余計なお世話だと私は鈴に向かってしゃべっていた。
肉まんを頬張る鈴はなんだかとてもうれしそうだった。

私は鈴と一緒にコンビニに行く事にした。

コンビニは意外と近くて、

里奈の家の前の道路をまっすぐ左に歩けばコンビニに着いた。

私はジュースを買った。

鈴はおむすびとジュースを買ったみたいだった。

そのまま、また里奈のうちに一緒に戻った。

鈴は静かに言った

「愛ちゃん、オレ今日の事は誰にも言わないからさ。

またそぼーぜ？」

何故鈴はそんな事を言ったんだろうとわたしは不思議な気分だった。
続けて鈴は私に言った。

「オレ、親居ないんだ〜孤児ハッチだぜ？」

保護者つうの？ああいうのは居るんだ。

保護者つうてもオレのじいさんらしいんだけどさ。

オレ年に1、2回しかあわねーの。変だろ？」

私はいきなりどうしたんだろうと思った

「、、、、」

私は言葉に何かを表せなかった。

そのまま鈴は続けた

「オレ15の時から1人暮らしなんだー、だからさ、里奈の家に来て家族つてこういうのかなって思った。」

私はその気持ちがよくわかった。

「うん。私も思ってたんだ。うん」

なんだか目頭が熱くなった。

鈴はニッコリ笑った。

「帰ろーぜ？」

そういった鈴はやっぱり笑顔だった。

そのまま私は鈴と里奈のうちに帰った。

生ぬるい暖かさの家族の暖かさがしみた。

私達は結局午後8時まで里奈の家に居た。

11話だた歩く(後書き)

誤字脱字があるかも知れませんが
よかった読んでやってくださいね汗

読んでくださってありがとうございます。

12話 こうちゃ

鈴に帰り道話しかけられた。

「愛さ、今日俺んち泊れば？」

私はラブホの事を思い出した。

「えーだって一緒に帰ったらやるんでしょ？鈴。。。もうやだなー」

私はそう面倒だと思って言った。

鈴は笑いながら

「ヤンねー！ー。もうなんか彼女とかそういう感じじゃないし愛
ちんはさー」

それには私もなんか納得できた。私と鈴はそういう関係じゃないな
って。

「まあそうだね。じゃあ鈴の家泊まるわ」

そういつて鈴と笑った。

家に連絡はしなかった、私は連絡せずにどこかに泊まることも多
なっていた頃の事だった。

私はクラゲだけど、本能は持っているって事なのだろうか。

鈴の家は駅から徒歩5分で着く場所で、正直高級アパートぽかった
デザインーズなんたらとか言っらしい。

部屋は何故か1人暮らしなのに2LDK。ありえない。
鈴はボンボンだったって事なのかな。

なんとなく鈴と私の世界の差を感じた。

とにかく広い、大きい窓と10階から見える外の景色。
ただゴミ袋が放置されているのは気に成った。

掃除しろよ。そう私は心の中でつぶやいた。

「なんか飲むー？」

そう鈴が冷蔵庫をあさりながら私に話しかけてきた。

「何があんの？」

鈴はえーっと、といいながら冷蔵庫を見ながら私に言った。

「コーラと、紅茶と、コーヒー」

私はコーラ、コーヒーまたキツイもんが入ってるなと思った。

「じゃあ、紅茶飲むわ。」

鈴は紅茶のペットボトルをだしてコップ探しながら私に言った。

「りょーかい」

鈴は私に紅茶の入ったコップを差し出した。

私は紅茶を受け取って、冷たい紅茶を飲んだ。
結構甘い味がした。

12話 こうちや（後書き）

長いです、、、、ね汗

長編のつもりで作った作品だったので汗汗

そしてココまで読んでいただいてありがとうございます

13話くらくら

私は鈴に聞いた。

「鈴さ、この前なんで私と寝たの？」

鈴は少し固まった。

変な質問だったかな・

「あたしね、さっきも鈴言ってたけどさ、

鈴は恋愛の対象じゃないよね。まあ酒によってたのもあるけどさ。

」

鈴はうーんと唸って

「なんか恋愛つつつか、sexしてみて思ったけど、愛ちゃんはちがーなって思った。

なんか、愛ちゃんオレっぽいし。」

どんな理由だと鈴に言いそうになった。

「はあ？」

「なんだろう、愛ちゃんオレっぽいんだよ。マジさ」

「あたし、鈴ちゃんみたいに男になったつもりないんだけど、、」

「そうなんだけど、うーんなんつつんだろ。

愛ちゃんの事かなり好きだけど、なんか恋人とかそういうんじゃないんだ。

つつかオレは男としてどうなんだろうなあ。。。。」

「、、、、、、、、鈴ちゃんたたないとか？」

私はリアルに鈴が心配になった。

「いや、そんな事はないけど。ただ淡白なだけだ！、、、、
と思う。」

少し鈴と私の間に微妙な沈黙が流れている。

「そ、そうなんだあゝ。。。。」

「愛ちゃん、マジデたたないとかおもったつしょ？
ちゃんとできる人間だから心配しないでください」

「本当かよ。。。鈴、、、」
そうっいつい突っ込む私が居た。

「でもオレ愛ちゃんとやんねーから。なんか、友達だし、つうか友
達になったから
もうやんねー。ちょっとオレ紳土的じゃね？」

鈴は相変わらず意味がわからない。

「何が紳士だっチューの。」
そういつて紅茶を私は飲み干した。

13話くらくら（後書き）

誤字脱字もあったかと思いますが
読んでくださってありがとうございます

14話 鈴のバイオリン。

「愛名！いいもん聴かせてあげる！」

そう鈴がいきなり、言ってきた。

「何？いいもん？聴かせるってなに？」

鈴はチョット待っててと言うと奥の部屋に消え去った。
何だあいつは、私はそう思った。

鈴が戻ってきて

私は鈴の持っている意外な物に目を奪われた。

バイオリン

「あつ、愛ちゃん、今にあわねーとか、普通に思ったでしょ？」
そういつて鈴は、私に笑った。

「にわねーどころじゃネーよ。
ひけるの？鈴ちゃん！」

「うん、仲間内でひく所見せるの愛ちゃんだけだわ。
ちなみにココ防音だから夜弾いてもOKなんだ」

そういつて鈴は

バイオリンを弾き始めた。

鈴らしくない優しい感じの音がした。

「なんつう曲」

私は鈴にわからない曲の名前を尋ねた。

「チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲　二長調つうの」

「題名そんななの？」

「そう、そんななの、他にもバイオリン必要なんだけどねー１つしかないからさ」

「まあ協奏曲だからね。」

鈴の別の才能を垣間見た、同時に私は少し悔しいようなそんな気がした。

「モウ１つ俺の好きな曲弾くね」

そう鈴はうれしそうに言った。

「ほーい」

私は簡単な返事をして
クラシックを聞くことにした。

「もう一度聞くけど何つう曲？」

「ラ・カンパネルラ。思い出があるんだ。いろいろ」

鈴は嬉しそうに笑った。

私はなんとなく、鈴がかわいい奴だと思った。

14 話鈴のバイオリン。(後書き)

誤字脱字もあったかと思いますが汗
ここまで読んでくださってありがとうございます

15話言った

鈴の演奏会が終わると、鈴はさっさとバイオリンをケースにしまつて私に言った。

「愛ちゃんさ、ベットで寝る？ソファがいい？」

私は即答で

「あたし、ベット。鈴ちゃんがソファでね」

「ハイハイわかつてるよそんな事。」
そういつて鈴は少し笑った。

「でも、鈴ちゃん、マダ話してようか。」
私はなんとなく良く分からないけどなんとなく寂しい気がした。
それだけで、私は鈴と夜中話をした。

くだらない話し、わからない話。

私は切り出すことにした。

別に軽蔑されても、もういい気がして。

家族の話を。

「ねえ鈴ちゃんあたしの家族、さ」

「、、、うん」

「よくさ、家族の事をさ、悪く言つとさ、人ってさ、まだ若いから
つていうでしょ。」

「うん」

「でも私は、違つなつて思う」

「ちがつつて?」

「私ね、受験に失敗したの。中学のね。」

「受験とかあんだね。」

「あるよ」

そういつて私は大きく息を吸うことにした。

いつも告白は簡単な事なのに、言葉が上手く口から出ない。

言つてしまった事は、いつも、簡単には取り消せないし

誰も記憶喪失になつてその記憶が消えていつてくれないからだ。

「受験に失敗してさ、家族から嫌われてるんだ。」

「、、、そんな事どうでもいいのにね。」

「うん。どうでもいいことなのに、どうでもよくなかつたんだ。」

鈴は何故か手を握つてきた。

私はそれを握り返した。

鈴の手はやけに熱くて、燃えてるみたいだった。

「だからね、私家でゴミなんだ。」

「愛ちゃんはゴミじゃネーよ」

そういつた鈴は強く手を握ってきた。

「うん、、、でもね、家じゃゴミなんだ。」

「ごみじゃネーよ。自分で言うなよ。絶対ゴミじゃネーよ」

「うん。アリガトウ」

私はボロボロ泣いていた。

私をゴミじゃないって言うてくれた言葉に目が熱くなったから。

「私、もう殴られるのが嫌だし、嫌われるのも嫌なんだ。」

「俺も、里奈も、愛ちゃんの事、、、殴んないし、嫌いになんてならない。」

鈴の手がぎゅうぎゅう握ってきて

私の手は酸欠みたいだ。

「うん、アハハ、鈴手が痛いよ。」

わからないけど、私は何かボロボロ涙と一緒に転げ落ちて行った気がした。

「あ、ゴメン」

そういつと鈴は手の力を緩めた。

私の手は鈴の手の熱さが移ったみたいに熱くなっていた。

わからないけど、その夜私はベットで鈴と一緒に手をつないでグー

グー寝る羽目になった。

鈴とはSEXしなかった。

出会った時はしたのに、なんだか変な感じもしたし。

鈴が言った、愛ちゃんとはそういう感じじゃないって意味もわかったような気がした。

鈴は大きい弟のようだった。

私の血のつがった弟は家族の中で成功を収めた徳ちゃんで、

私の本当の血のつながらない弟は、今私と手をつないでベットにグーグー寝ている鈴なんだとなく思った。

不謹慎だけど、飲んだ後いつの間にか鈴とSEXした事があったけどそれって弟としたってワケか、、

そう思うとなんか私はどうにもこうにも、波に流されやすい生き物なんだと思った。

15話言った(後書き)

誤字脱字もあつたかと思いますが

ココまで読んでくださってありがとうございます。！

最後の辺まで考えてはいるんですが、

話が、、、どうやって変えていっていいやらで、

書きかけの小説が2、3個溜まっていつてます、、、クラゲ、、、

私自身こんなに話が長くなる予定は、、、なかったのに。。

どうやって完結までもって行こうか悩んでおります。。

16話、箸

朝起きた頃にはもう昼になっていて
私は学校をサボる事にした。

あーきつと家に連絡が行っているのかもね。
もう今更どうでもいい気がしてまた私は鈴のベットでグーグー寝始めた。

手をつないでたはずの鈴はベットから居なかった。

それから少し眠った時に
ピンポンとチャイムが鳴った。

あー、、誰か来たんだろうケド、、私この家の人じゃないし
でれないなあ、、そう思った。

だってもし鈴の彼女とかだったら私がピンチだし。

そう思って眠りにつこうと思ったけど

ピンポンはやまなくて、私はおきることにした。

とりあえず人が居る事がわからないように忍び足でドアまで歩いて、
玄関のドアスコープを覗き込んだ。

ドアスコープを覗くと外に居たのは鈴と里奈だった。

それを見て私は、ドアロックを解除した。

「なかなか玄関開けてくれないから鈴ちゃんも私も困っちゃったよ
」

「え？だって鈴鍵は？」だって鍵ぐらい鈴は持ってるはず。

「家に、、忘れてた。。。」

私はそれを聞いてビックリした。
もしあたしが帰っちゃってたら大変な事ですよ。

「えーーーー、あぶないじゃん!」

「危なかった、、アハハ」
困った連中だ。

鈴と里奈はスーパーの袋に沢山の食材をつめて部屋に入ってきた。

「まだでしょ?ゴハン」

そう里奈は私に笑顔で言ってきた。

「あ、うん。」

里奈はニコニコしながら

「あたしがゴハン作ってあげるよ、鈴も台所使っていい?」

うんいいよ」と寝室に消えた鈴の声がした。

少し鈴が消えた、間私と里奈だけの空間になった。

里奈は私に切り出した。

「鈴と寝た?」

少し私は戸惑って、でも緊張したせいなのか私は本当の事を喋った。

「、、、実は、前に、寝たことがある。」

「うん、なーんとかそんな気がしてたのよ」

里奈は私を見てまた笑った。

「愛ちゃんちよつとコツチ来て」

おいでおいでと里奈は手を出した。

私は何をされるのか少しおびえながら里奈の近くに寄った。

里奈は私の耳に手を当ててヒソヒソ話をするみたいに言った。

「私、負けないよ？鈴ちゃんの事がすきなの。」

そいつって少し照れたように里奈は笑った。

「あーそれだったら大丈夫、私、鈴の事弟みたいな感じがしちゃってるし

男性としてもう見てないんだ。」

私ははつきり口に出してしまつて、

部屋から出てきて私たちの声が聞こえる距離に出てきていた鈴にバツチリ聞こえてしまった、ワケだ。

まあどうでもいい、多分2人とも同じ考えなんだから。

里奈の方が、鈴より目がまん丸になつて驚いているようだった。

「えーそうなの？」

里奈はそう叫んだ。

「え、、俺話が飲み込めないんだけどさ。。。え、何とりあえず、俺も愛ちゃんは異性として全く見てないよ。

えーっとね。野獣って感じ。」

野獣とはよくも言ったものだと思つて、私は手元にあった箸類を全部、投げつける事にした。

「何すんだよ！愛！」

少しむつとした様子の鈴を見つ

私だつて腹の虫が立っている。

「あーら、悪かったわね！野獣で！」

私は八つ当たりをした。

「悪かったけど、箸はねーじゃんか！」

「2人とも辞めたら？もうおかずできるよ？お箸拾って洗ってね」
あっさり里奈に私たちはとめられた。

「2人ともケンカが子供っぽいよ。」

そう言っで里奈は皿を勝手に食器棚からだして
盛り付けをはじめた。

私と鈴は一時休戦をする事にした。

16話、箸（後書き）

誤字脱字もあったかと思いますが
ここまで読んでくださってありがとうございます。

17話、姉弟

私達は3人でゴハンを食べた。

鈴はパスタを食べていたけど
口の端にキノコのカスがくっついていた。

里奈は笑って鈴の口元を指差していた。
鈴は無造作に口をぬぐっていた。

私はただひたすら口にゴハンを運んでいた。

「愛ちゃん、食いしん坊みたいだね」
鈴が余計な事言うけど
さっきの事があった私は鈴を少しにらんで
また食べ始めた。

軽いシカトを実行だ。

里奈はそんな気まずい空気を打開すべく
楽しい話しを無理にしだして
私と鈴はついにそれに折れて
一緒に笑い出した。

「それちょーウケルんだけど里奈」
そういつて鈴は馬鹿笑いをした。

私も笑いをこらえたけどやっぱり
くすくす笑ってしまった。

里奈はすごい晴れやかに笑ってた。

何故か私は鈴の部屋から外を見た。

外はすごい晴れて、空がきれいだった、目がくらんだような感じがした。

私は目を少し細めた

それを見た鈴が

「愛ちゃんどうしたの目細めるとなんか、クマが目立つよ」とか行ってきた。

「う、る、さ、い！メイクでかくれるからイイのよ」

そういつて私は少し膨れて見せた。

東京はいつもゴミゴミしているのに、この場所だけはやけに晴れて感じた。

私は何故だかその景色を忘れちゃいけない気がしてた。

何故だか私にはわからなかったけど

すごい大事な気がした。

サラダのレタスを私はほおばった。

里奈は私の口を指差して

ドレッシングついてるよと

またキレイに笑った。

私はわかってるといって、口をぬぐった。

「愛、あのねー男みたいにぬぐわないの！鈴ちゃんじゃないんだから」

そう里奈は言ってまた笑った。

なんだか本当に鈴と姉弟なんじゃないかと私は少し錯覚した。

17話、姉弟（後書き）

えーっと遅くなりました。

結末は考えているけど

どうしてもそこまでどうやってもって行っていいのか
訳わからなくて、中断してました汗

誤字脱字変文は見逃してください

18話壊れた（前書き）

表現が過激になります。

不快な表現が多発するかと思います

18話壊れた

私たちは夜中まで鈴のアパートにだらだらといて、

鈴の持っていた音楽のCDを聴いたり

エロ本探索をしたりして鈴を大いに慌てさせた。

どういうエロい子が好きなのよと私が鈴をつついて言ったりした。

鈴は少し気まずそうにしていた。

里奈はそれを興味津々にしていた。

そんな時間がどんどん流れていって

夜中にならなくなっていった。

夜の11時に里奈は帰るといった。

私はもう一泊鈴の家に止る事にした。

里奈はそれじゃあねといっていた

私は外まで鈴と一緒に送る事にした。

里奈は鈴が少し離れた時に私に耳打ちした

「少し焼けるよ」

そういつていた。

私は

「大丈夫なんだけど」と言った

鈴が、何が？と聞いてきたけどそれはもう
無視する事にした。

私は、この後、後悔する。

私の人生で、一番の後悔をするんだ。

鈴と一緒に泊まればじゃんって言えばよかった、
もっと夜更かしすればよかった。

もっと一緒にいればよかったと思うことになる。

午前2時に、携帯電話の着メロで目が覚めた。

「あー、誰だよこんな時間に、、、もう・・・」

そっぴいっつ私は携帯をとった。

着信は里奈。

メールじゃないことに私は不思議さを感じつつ電話に出た。

「もしも、っし里奈、こんな」

私が言葉を続けようとすると、里奈が声を出した。

「あい、私もういや、助けて。もうやだ。」

その声に私の眠気はすべて吹き飛んでいた。

かすかに泣くような声でした、不安な予感が私を襲ってきた。

「どうした、里奈？どうしたのねえ」

「公園」

里奈はそれだけ言うと電話を切った。
嗚咽と息切れが聞こえた。

へんな予感がして、私は着替えて
外に飛び出した。

私が走って走って、電車に乗って、走って走りまくって
公園に着いたとき私は思った。

もし私が外国人なら、Jesusとつぶやくか、叫んでいると思う。
こんな世の中なんて世界ごと腐って消えちまえばいい！そう私は叫
びたかった。

私が見た里奈は公園のブランコに座っていた、
体を隠すそうに腕で体を抱いていた。

座っているだけならよかったのに。私は心の底から思った。

世の中は汚い。fuckだ。

里奈の足は泥だけで、こすれた皮膚から血が出ていた。

私を見上げた、里奈の顔は殴られた後があって、キレイな里奈の顔
がゆがんで見えた。

何故里奈の服はこんなに泥だらけなのか、

何で里奈の上着は胸元からボタンがなくなっているのか。

何故スカートが泥だらけなんだろう。

私の心臓は冷たく強くときどきと波打った。

なんて不安で嫌な気持ちなんだろう。

今までこんな最悪な心臓の鼓動はなかったのに。

私はただ、里奈を抱きしめて、一緒に大泣きした。

里奈はレイプされた。

18話壊れた（後書き）

ちよつと話が急だったような気もしないわけじゃないけど、
これから少しの間話がバッドになっていきます。
暴力的な内容もある？かもしれない

誤字脱字は見逃してください

19話、暗闇

暗い公園に里奈を抱きしめて私は何か存在のないようなそんな気分になって、何も考えずに笑えなくなっていた。

笑うってどんな思考で行っていたんだろう。

世の中どうなってるんだろう。

何にも知りたくなってる居ない、私はそう思った。

リアルじゃない、何にも、本当にあることなのか、ないことなのか。アマリにも全てが唐突過ぎて、私の頭は壊れ始めてきたのかとも思う。

何か里奈が喋って、動いて、私が抱きしめている体の振動だけ。私に伝わってくる振動だけが、今のリアリティだ。

頭が何故こんなに真っ白なんだろう。本当にわけが分からなかった。

携帯の着信コールがただ真っ黒な世界に響き渡った。

私はただかすかに震えて、それで動きがぎこちなくなる

そんな腕で、携帯をつかんで電話に出た。

鈴の明るい声に

私の体はギクリとした、

「どこにいったの？夜危ないぜ？」

そついう明るい鈴の声が、アマリにも世界が違つように思えた。

紛争地帯と、大富豪の家の中のような差を私は感じた。

ギクリとする体は抑えようがなかった。

私はそつと里奈のほうを見た。

何かを知られたくない顔、おびえた雰囲気。
そういうのは、もうどうしようもなく
私を動けなくさせていくばかりだ。

今更何にすればいいんだろう。

良く分からない。でも今すぐれるのは鈴だけだ。
もう、私の小さい世界は告げていた。

「公園」

私はそういつて、もう電話を切った。

里奈はもっとおびえて、裏切られたような顔をした。

私はどうしようもなく、分からなかったけど。

里奈を力一杯抱きしめた。

意味が分からないくらい、どうでもいいくらい、ただ抱きしめた。

私は無力でしかない。

19話、暗闇（後書き）

まだマダ続きます

読んでいただいてありがとうございます。

クラゲシリーズがおわったら番外編のコメディ
になる予定。。。。

予定なのでえーっと、、先は長いです。。。。
（死）

20話、それ

息を切らした鈴が来て、鈴の周りの空気は私から見ても重くてきつと鈴からみた私たちも同じように空気が暗かったと思う。

公園の空気は殺伐として、たまに通る車のライトが里奈と私を一瞬照らして

また去っていった。

鈴は私たちのそばに来て、何も言わずにそこに立っていた。その後、鈴は持ってきたジャケットを里奈に着させた。

やっぱり私たちは何も言わず、時間はドンドン流れていってかなり時間がたって、寒さで鳥肌が立って来たとき

「俺の家に、帰ろうか。」

そういつて鈴が切り出した。

私は何も考えられなくて、里奈も同じだったようにで抱きしめたままの里奈の肩越しに里奈がうなずいた振動だけが伝わってきた。

私はうなずくとか、そういうのが分からないくらいに真っ白で、動揺していて、でも表に出せないくらいわけが分からないくて

うなずく振動だけ、里奈の肩だけを見続けていた。

鈴が手を貸すと、里奈はそれにおびえたようにした。

鈴はそれに少し傷ついたような顔をしたけど、薄手の上着を脱いで里奈にかけてあげていた。

何も私はいえなくて、ただ里奈の手をずっと握っているだけが私の本当の精一杯だった。

私の手も里奈の手も氷みたいに冷たく硬くなっていた。

冷や汗が余計に冷たく、気持ちが悪いくらいその状況を出していた。

3人で鈴のアパートに帰った。

アパートの電気をつけて、鈴は服を探しに奥の部屋に消えてった。

「シャワー、、、浴びてきなよ、鈴が洋服持ってきてくれるって、だから」

そうって私は言葉に詰まってしまった。

何もかもがうまく言えない。

なんで、ゲームみたいになんでも、前のセーブポイントに戻れないんだろう

何で巻き戻しできないんだろう。

私はうつむいてしまった。

「シャワー、、、借りてくるね、、、」

里奈は言ってお風呂場に行った。

きつとシヨックなのは里奈なのに、私の思考は

すごいシヨックを受けていて、頭が何も考えられなくて、シヨートしたままだ。

鈴が服を持って出てきた。

「服、スエットしかなかったけど、いいかな、？下着とかどうしよう、、愛、、」

すごい困った顔で、でも必死に私に笑おうとして、苦笑いのままだった。

私はうまく声が出なくて、里奈がシャワーから出る間
めめそと泣いていた。

鈴はもつと困ったようで、また億の部屋に消えて、ハンカチとティ
ッシュを持ってきた。

「ハイ」

そういつて鈴は私に差し出した。

声を上げて泣きたいけど、それをガマンした。

なにもかも崩れたようなそんな気がしてとても、悔しかった。

20話、それ（後書き）

え、っとなかなか前に進まない

そして友人にお前コレと似た話多いよ
的な事を指摘されました。

エエーーーーー！そうなんですか！！！！マジッすか

軽いショックを受けました。。

正直削除も考えてたんですが。。

まー書いてしまったのだから、最後まで書いっとく、

誤字脱字もありますが

最後までお付き合いくださいませ。。汗汗

21話

泣いていると少ししてから

「もう、泣き止めよ、辛いのは俺でもお前でもないんじゃない？
泣いてんの、見たらあいつも苦しむよ」

鈴はそういつて私の顔にグイグイハンカチを押し付けてきた。

私はそのハンカチを鈴から奪って目をグイグイ拭いた。
鈴は何にも言わず真剣な顔で私のかを覗き込んでいた。

「愛ちゃん服さ、里奈のトコ、置いてきてやって、俺、男ジャンだ
からさ、、、」

途切れ途切れ、鈴はいった。

私はうなずいて

里奈のいるバスルームに洋服をおきに行った。

「里奈、、、服置くね、、、」

そういつて私はバスルームを出てきた。

小さい声で「うん」っと後ろから聞こえた。

その声を聞いて私はまたボロボロ目から涙を流した。

鈴は何も言わずまたハンカチを押し付けてきた。

何も出来ないこの時が分からない、どうしたらいいんだろうと私は
思ってしまう。

すこし、私は居間のソファで座り込んでボーっとしてた。

里奈はシャワーから出てきて、

鈴と私を見たら走って寝室に走って行ってしまった。

里奈の目は真っ赤で泣き腫らしたんだと分かった。

「愛ちゃんもう、寝なよ、里奈についててやって、

俺女の子じゃないから、一緒にダメだろ。。。おれこっちのソファでねるからさ。」

そう鈴は小さく言った。

私はうなずくだけで、言葉には出さなかった。

寝室を軽くノックして私は入った。

里奈はうずくまっでいて私は何にも言わなくて何にも言えずに布団に横になった。

小さくうずくまっでた里奈を私はじっと見た。

少しはみ出た髪と頭を見つけて私はそっと、彼女の頭をなでた。

里奈の鳴き声はとっても大きくなって

私も一緒になってボロボロ涙がでてきた。

私は泣く里奈と一緒にいて

里奈が泣き止むくらいになって、眠くて眠っていた。

夢は何も見なかった。

ただ、眠っていた。

おきて里奈がいなくてすごく、焦って、寝室を飛び出した。

「里奈は！いる！」

そういつて大声でリビングで叫んだら
鈴がすごいビックリした顔をしていた。

「う、うんいるよ、、お風呂入ってる、、、よ。死んだりしてないよ、大丈夫」
そういつて、少し苦笑いしていた。

すこしリビングは荒れていて、物がすごいグチャグチャになっていた。

「これ、、、どうしたの？」
私は鈴に聞いた。

「、、、ベランダに出ようとしてて、止めたんだ、その後、愛ちゃんチョットお風呂見てきて、、、」
そうゴハンの準備をしている鈴が、目を合わせないように、しながら私に話してきた。

私はうなずいて、シャワールームに行った。

21話 (後書き)

何故進まないんでしょうね。。。汗汗
文章能力が欲しい、、ほしすぎるよ、、

22話、シャワー

私はシャワールームにノックもせず入った、ガラガラと小さく戸が開く音がした。

里奈はただお湯が降り注ぐシャワーの下にうずくまって、泣いていた。

ただお湯がドンドン流れていって、私はやっぱり何も言わず、シャワーのコックを捻って

お湯を止めた。

里奈の上にタオルをかけた。

「ねえ、ごはん出来てるよ。向こう、行かない。」

私はそれだけ言った。

里奈は泣いていて、私はただ里奈の上にかけたタオルで里奈の髪を拭いた。

うずくまっていた里奈がすごい小さくて聞き取りにくい声で喋った。

「ねえ、何で私だけ。」

私はハッとした、でも何も出来ないし何か変わるわけじゃない。

里奈はそれを言うと大声で泣き出して

また同じ言葉を口にしていた

「何で私だけなの。なんで、他じゃないのねえ、ねえ、ねえ愛、愛
おかしいよ、ねえ」

そういつて私に寄りかかってきて

泣きながら叫ぶようにして言葉を言う里奈に、私はなににもできなかった。

ただ里奈の寄りかかった場所が水でぐつしよりとぬれていた。何も知りたくない、分かりたくない私は同時にそう思った。何もかもが一緒に気持ち悪かった。

いつそんな世の中消えてくれ。私は神様がいるなら、今そう願う。私は寄りかかる里奈をただ見つめていて、何の現実も取り戻せない。何を見ているのか分からなかった。

里奈の鳴き声がただバスルームに反響した。

鬱陶しいくらいの泣き声が私は少しイヤになって

「ねえ、ごはん食べよう、ねえ行こうよ。里奈。」
ただ私はそういった。

22話、シャワー（後書き）

、、、抜け出せない、、ストーリーが前に行きません
とりあえず、お気楽に読んでやってください汗

誤字脱字乱文ですがよろしくお願いします。

23話

里奈を説得するのに、私はバスルームに籠って
慰められずにただ、ゴハンを食べようとしかいいえなかった。

1時間して、やっと里奈がバスルームから出てきた。

鈴がバスルームからでた廊下の辺りにいた。

横目で少し冷たい目で私達を見た。

そんな鈴の様子は今までも一度も見たことがなかったから
私はとっても不安になった。

「ごはん、出来てる、から」

鈴は一言そう言って、一人でリビングに行った。

気まずい空気に私は軽く下を向いた。

里奈を無理に引っ張ってリビングに向かった。

目玉焼きとパスタがテーブルにおいてあった。

鈴は冷蔵庫から、ミネラルウォーターを出していた。

里奈の手を引っ張って、テーブルと一緒に着いた。
ずっと、里奈は下しか見なかった。

鈴が頑張って笑顔になって

「オハヨ、こんなにかさ、出来なかったけど、食べよう。」
そういった。

いただきまーすと鈴の声がした。

横をそつと見るけど、里奈は顔を下にして誰にも見せないようにう

つむいたままだった。

前に顔を抜けると、鈴と目が合った。

鈴の目は疲れているように曇って見えた。

結局里奈は食事を取らなかった、時間が過ぎて3時になってソファ―に座ってずとうつむいていた里奈がやっと喋った。

「もう、帰るね」
ただそういった。

私は不安だった、一緒についていくことも私は不安になった。
私には荷が重く感じた。

鈴は少しその姿を見てから

「俺達も一緒に行くから。ちゃんと、家に送り届けるから。」
目をつぶってそういった。

23話（後書き）

タイトルが、、つけられなくなってきた。。（↑ヤバイ、、）
まだまだ読んでくださってる方、お付き合いくださいませ

誤字脱字のままですが失礼します。

24話

私と里奈と鈴は、昨日と同じ道を歩いて、アノ公園に来た時3人で手をつないだ。

小さい子供が通って変なのつと他の子達と口々に言っていた。手をつないで、私はほっとした。

何故だか分からないけど、少し、元に戻れた気がした。目頭が熱くなった。

駅で切符を買うときも私は里奈の手を離さなかった。本当は私は怖かった、里奈のことを考えられないくらい、目の前の事で一杯だった。

電車に乗って、周りは興味の目で手をつないだ私と里奈を見ていたけど、

どうでもよかった。

里奈の家まで3人でまた手をつないで歩いた、通りかかる人はやっぱり面白そうな顔で覗いてきた。

里奈の家の前まできて、鈴はアパートのドアをノックした。里奈がいるんだから、いいんじゃないっと思っただけ。というのはやめた。

辛い事があった次に、人はどんな事をするか分からない。だから誰かがいつもソバにいてあげなきゃダメだったこと。

ハイと言う声が家の奥から聞こえた。里奈のママがドアを開けてくれた。

里奈は家の中にすぐ走って入ってしまった。

「里奈のこと、よろしくお願いします。」

今日、だけじゃなくて、ちよつとずつといてやってください。

辛い事があつたんです、でも無理に聞かないでやってください。

お願いします。」

そう言つて、鈴は里奈のママに頭を下げた。

正直ビックリした。

鈴がすべて悪いみたいで、何をすべきか私には分からなかった。
でも、私も頭と一緒に下げた。

「お願いします」

そう私は小さい声で言つた、声が震えた。

24話（後書き）

頑張っ て書いております、 、 、 サボっ ていた分。 。 汗

誤字脱字は見逃してください汗

25話

それから、また同じ道を私と鈴は戻った。
今度は鈴が私の手を握っていた。

切符を買って、電車に乗って、またアノ公園に来た。
私は公園を通る時泣き出した。

鈴は何も言わなかった、いつもと同じ少し笑っていた。
それもとて悲しくて、全部悲しかった。

「大丈夫、また、一緒に遊べるよ。いつもそうだっただろ。大丈夫だよ」

鈴は私の手をとて強く握った。
私の手が白くなった、痛かった。

鈴の部屋にまた戻った。

もうまた家に帰りたくなった。
全部重くて、全部なくなつて欲しかった。

「愛ちゃん、もう一度寝たほうがいいよ、顔色悪い。俺は掃除とかあるし。」

寝ておきなよ。」

そういつてもう一度鈴は軽く笑った。

「うん、」

そういつて私は、寝ることにした。

でも布団の中に入っても、

サツキまで一緒にいた里奈のうずくまつた姿が焼きついて

そこに里奈がいるんじゃないかって、思えた。

涙が出てきた。

少し遠くで掃除機の音が聞こえた。

鈴は、何を思っているんだろうか、私はへこたれていて行動できない。

布団が、冷たく感じた。

掃除機の音がやんで、パタパタと少し足跡がして食器の音が聞こえた。

私は目をつぶって、寝ることだけに集中した。

少し、眠った後廊下に私は出て、鈴の姿を探した。

リビングでのソファーに寝転んでいる鈴を見つけて、声をかけようと思った。

でも

鈴は泣いていて、声をかけずにまた静かに寝室に戻った。

皆動揺していて、それを目の前で見て、辛く思っていることには変わりないんだと、

私だけショックだったわけじゃなく、鈴だって同じくらいショックで、

それを頑張って笑ってたんだって思った。

もうどうにも出来ないことが、私は辛くて分からなかった。

25話（後書き）

まだ、結構続く予定でございます

乱文誤字脱字は見逃しつつ読んでください汗

26話

寝室に戻ってもう一度寝ることにした。だって、夢なんじゃないかって思った。

だから一生懸命目をつぶって、目を閉じ続けた。

目が覚めたら、夜で、鈴の寝室だった。

リビングに行くとも明かりがついていた。

「なんか、食べる。残り物とかしかないけどさ」

そういつてリビングのソファアに座っていた鈴が喋った。どこか遠くを見るような目だった。

やっぱりあの事は、夢じゃないんだと思って、重く感じた。

「うん、ゴハン食べたいし、残り物でいいよ」

鈴は重そうなに立ち上がって、

キッチンに行った。

私はソファアに交代のように座り込んだ。

ぼーっとしていると鈴が目の前にパスタが入ったお皿を渡してきた。

「ハイ、どうぞ」

私はそれを受け取って、フォークを受け取って食べ始めた。

向かい合いに鈴が座って、2人で食べた。

1度もテレビをつけずにいて、少しとなりの部屋の音がかすかに聞

こえた。

私は何故か鈴に切り出した。

「ねえ、鈴ちゃん、しばらく、この家にいていい？
今のままじゃ戻れない気がするよ。後で家賃払うから。」

そういったら、ほんの少し沈黙があって

いいよ、って声がした。

鈴は下を向いていて、表情が分からなかった。
でもOKしてくれた事にほっとした。

鈴も、きつと1人で今は居たくないんだと思った。
私はアノ家に帰ったきつと押しつぶされてしまう。
ここに居たいと思った。

私はどうしてか目が熱くなって泣きながらパスタをむさぼった。

26話（後書き）

ゾクゾク頑張って新規してみました。

お付き合いください汗

誤字脱字を見逃しながら汗

27話

私は鈴の家で寝起きた、学校にも行かなかった。
もしかしたら警察に届出でも出されているんだろうか？
そうも思っただけ、帰らない事なんてよく在ったから気にしていな
いだろう。

それより重要なのはきつと彼らにしたら
学校に行っていない事だろうと思う。
どうでもいい。

今は何も考えたくないそう思った。

鈴の家にいて3日目になった、どうしようもなく無気力で
外に出なかった。

鈴は何も言わなかった。

今日になつて鈴が寝室に入ってきた。

「愛ちゃん、里奈のトコ、行こう。あとまだ居るんっしょ？服とか
買いに行けよ」

鈴はそういった。

里奈と聞いて何故だか私はドキリとした、
あれから連絡もない、どうなったのか私は酷く怖くなった。
ドキドキと怖くなって心拍があがるのがわかった。

鈴はないかを感じ取ったのか私に言った。

「大丈夫だよ、行くぞ。」

その後この3日間なにも言わなかったのが嘘のように
鈴はまともな服を着るとか指図してきた。

私はハイハイといいながら服を着て
里奈の家に行く準備をした。

里奈がどうなったのか、酷く怖かったけど、それでもせかされて
私は着替えた。

私と鈴はまた同じ道を歩いた、3日前にあった公園にくと
ドキドキと動悸がした。

そこを過ぎて、切符を買って、電車に乗って歩いて
里奈の家に行った。

それもノーコンタクトで。

鈴は里奈の家に人がいるか分からないのに、玄関ドアをノックした。
ブザーは壊れていて鳴らなかった。

27話（後書き）

誤字脱字もあります
が
どうぞよろしく願います
汗

28話

ドアをノックして

「すいませーん居ますか」

と鈴は大声で言ったら、中から里奈のママが出てきた。

ちよつと疲れた様子で

笑って私達を中に入れてくれた。

「どうぞ、入って」

私達は踏み場のない玄関に入って、中に入った。

里奈の部屋の前に来て里奈のママは、部屋をノックした。

私は冷や汗が出た、手を強く握りしめた。

里奈のママは里奈の部屋を開けた。

心臓が本当にドキっとした。

冷や汗がでた。

里奈はそこにいて、クマが目に出ていた。

私と鈴をみて少し笑った。

私は部屋にダッシュで入って衝動的に里奈に抱きついた。

鈴はそれを見て、

「いきなりなに抱きついてんだよ」

そういつてほっとした顔で笑った。

何かが少しだけ戻った感じがした。

里奈のままもほっとした顔だった。

3日前の事には何も触れずに、私達は話した。

でも鈴を見る瞬間の里奈は緊張した感じに見えた。

鈴も分かっているようで、何かをいきなり話したり、無理に輪の中に加わろうともしなかった。

里奈はやっぱり疲れているようで、時折びくつく事もよくある。

私はうまくいえない気分だった。とつても不安だった。

でも必死に普通に振舞った。

少しして私と鈴ちゃんは里奈の家から帰ってきた。

帰り際に鈴ちゃんが里奈のママに何かあったら電話とかしてくださいって

電話番号を渡していた。

多分、きっとそういう事があった後って、

鈴が何かあったら電話欲しいというくらい、

の事があってもおかしくないってことなんだって思った。

私は目線を下に落とした。

鈴がいきなり頭をばんばんと叩いてきた。

「何？」

そう聞くと、鈴はちよつと真剣な顔をして

「大丈夫だって」

そういった。

私は泣かずにただ、下を向いていた。

帰り際にシヨップによって、2、3着服を買った。

28話（後書き）

大丈夫と鈴君が一杯言っておりますが
とりあえず、バッドエンドとも選択されていますので
それなりになるかと、、、、思います。

まだまだお付き合いください
誤字脱字はお見逃しくください

29話

日常に差し障りない程度の服を買って、下着も買った。よく考えると3日も家に帰らずに私はいた。

でも私には、それが居心地がよかつたし、安心できた。何もされない、何も怒られない、苦しくない。

里奈の事がすごいショックだったけど、家に帰らない事が私は安心できた。

矛盾している。

分かっているんだけど、私は心がキレイじゃないと思った。

鈴の部屋に着くと私はソファアに転がった。鈴は横目でそれを見て寝室に入って行ってしまった。

わからないけど、とっても疲れていた。

何も考えずに、今は寝たいと思った。

ちょっと寝るつもりだったのに、起きたら朝の4時になっていた。

徐々に夜明けになって言って、私はカーテンをあけて、ソファアに座りなおした。

西日が差してきた。

この数年間私はこんな朝をみたことがなかったと思う。

ただひたすら、西日を見ていた。

朝になっているんだと、思った。

そう思って私はもう一度2度寝をした。

昼ごろになって鈴に起こされて、メシを作ったから食べようといわれた。

特に話す事がなく私達は黙々と食事をした。

3日間ずっとパスタで私は飽き始めた、トマトの味がまずかった。

「鈴ちゃん、パスタそろそろ辞めよう。」

私はそういった。

鈴は少しうなずいてパスタを食べ始めた。

それから1週間そんな生活を鈴と一緒に送った。

ただ、そのままの生活をだらだらと2人で送り続けた。

29話（後書き）

誤字脱字は見逃してください
まだ続きます
よろしく願います

30話

ただ過ぎる毎日に甘えて私は、ごろごろとソファに沈んで寝ている。

鈴ちゃんが私のわき腹を足でグイグイ押してきた

「あーいーちゃん、食っちゃ寝食っちゃ寝してたら、
ブタになるねそのまま。」

愛ちゃんこの1週間一度も外に出てないし、
たまには外に出たら？腐るよ。」

鈴は手にお皿を持って私に言った。

「朝飯？、今日なに？」

私はそういつて、ほかの事を無視した
一度鈴は大きいため息を吐いて

「今日は目玉焼き、トースト終わり」

そういつてお皿をテーブルに並べ始めた。

午後になって私はソファに沈んだままテレビを見ていた。
鈴はリモコンでテレビを消した。

「何？いいトコだったんだけど。」
そういつて私は軽く鈴をにらんだ。

「ブタになるぞ、追い出されなくなったら、里奈の家行くぞ。」

そういつて鈴は私を目で追った。

たまには外に出ようと思って、私はゆっくりソファから立ち上がって

起き上がった。

シャワーを借りて、その後1時間かけてメイクをした。

鈴にはメイクをしている途中で、化けるなお前といわれた。久しぶり外に出るからメイクぐらいしようと思った。

里奈の家には5時前についた、ダラダラ歩く私を鈴はせかしながらいった。

またコンタクトも取らずに里奈の家に行った。

里奈の家のドアをノックするして、何度かすいませんと言っていたら里奈が出てきた。

「、、、、久しぶり」

そう里奈は言った。

「うん、久しぶり」

私もそういった。

里奈はその後、部屋に入れてくれた。

鈴は来る前に買っていたお菓子を里奈に渡してた。

里奈はほんの少し、顔色が悪かった。

でも、あの時みたいに、鈴におびえたりしなくなっていた。

30話（後書き）

徐々に後編に入っていく予定？

でもね、、、最終話までは決めて在るんですが話しの肉付けが出来ずに困っています

ハイ、、、、・・・；

誤字脱字はお見逃してください

31話

鈴は里奈に最近の私の様子を話して最後に

「このまま、太ってくかもしれない。」
といった。

余計なお世話だと思って
里奈の枕で鈴を叩いてやった。

またゲームをやったり、馬鹿な話しをしたり、
鈴が途中で寝てしまったり、里奈のママがゴハンを作ってくれたり
して
帰ったのは終電だった。

鈴の家に着くと、1週間外に出なかった私はすっかり疲れて
リビングのソファーにぐったりと沈み込んだ。

鈴はそれを見て、やっぱりブタになりかけてんじやんと憎まれ口を
叩いた。

そのまま私は眠ってしまって
おきたら昼の12時をまわっていて、私には毛布がかかっていた。

鈴は不在で、携帯をみたら、メールで
バイトに行ってるから2日帰らないとか書いてあった。
どれだけバイトに行ってるんだよとか思った。

でも、私も鈴の家に一生居られる訳がないって分かった。
高校を辞めるにしても、私にはお金がない。

1人で暮らせない。

今は鈴にお世話になってるけど、

このままズット住んでいるなら家賃だつて払わなきゃいけない
払わなくていいなんて、そんな世の中お人よしなんて存在しない。

そういえば、鈴は学校に行っていないしTATOが入っていた、
あいつはなぜこんな大きな

マンションに住んでるんだろう。何故1人なんだろう。

今まで遊ぶだけだった相手なのに、一緒にすんでいると

いろんな事が不安になって、分からない事に気が付いている。

今日、鈴の事を聞こうそう、もたれたソファーの中で私は思った。

31話（後書き）

徐々に、後編にハイって行っております
でも、かなり躓きそうな。。。汗汗汗
お付き合いくださっております
皆様ありがとうございます汗

誤字脱字はお見逃してください。。。。

32話

2日間、私は近くのコンビニに行ってごはんを調達した。夜は出歩かなかった、コンビニにも行かなかった。

ただ、私は電気もつけずに、ただソファアの転がっていた。もう、夏も終わるんだと思った、ソファアの生地が

肌寒かった。

2日目の夜に鈴は帰ってきた。

ソファアでぼーっとしている私を見てかなり驚いた様子で

「電気ぐらいつけようよ!!!幽霊かと思ったし、うっわ、あせった。。。」「

そういつてテーブルを見てため息をついた

「あのね、あいちゃん、、、ゴミはとりあえず捨てようか。。コンビニ弁当はいいけど、、さ、

ゴミを置きっぱなしにしないで、、欲しいな、、、、」

そういつて鈴は私の出したゴミをそそくさと片付けてリビングの電気もつけた。

とてもまぶしいかった。

鈴がゴミを片付けている時に、私は切り出した。

「ね、鈴ちゃん、、あのさ、この部屋ってさ、家賃とかどうして

んの？

鈴ちゃん私とタメぐらいだよな？

でも刺青入ってるし、学校も行っていないよね。
なのに、なんでこんな部屋持ってるの？

私、置いてもらってるのに何にも知らないし、
もしこのままここにいるとしても

お金、折半しなきゃだめだよな。」

私がそういうと、鈴の動きが止まって。

私をじっとみた。

「それ、知る必要ってあんの？」

そう鈴は私をじっとみて言った、怖かった。

「、、、何にも、知らない人のうちに居るって変だよ。

友達なのに、何にも知らない、一緒に居るのに、何にも分からない
変だよ。里奈のほうが私、沢山知ってる。でもね鈴ちゃんの事

何にも知らない。」

私はうつむきながら言った。

不自然な蛍光灯の明かりが目には痛かった。

鈴は、片付けをやめて、台所の水道で軽く手を洗ってから
私の向かい合いのソファ―に座った。

目線を合わせてくる鈴、目線を合わせない私。
空気が重かった。

10分ぐらい経った後に鈴がうつむいて喋り始めた。

「俺の両親は居ないんだ、もう2人とも死んでんの。」

母親のほうは7歳の時ガンで死んで、オヤジはその時はもう出てった後だった。

妹が2人いるんだけどさ、一番下の妹はオヤジが浮気して出来た妹で妹も両親が居ないんだ。

んで、15の時はじめて一番下の妹にあつた。

俺、祖父に引き取られたんだけど、そりが合わないんだよね。年に1度あつたらしいほう、家は親戚任せ。

2人の妹は嫌気が指して、今は爺さんの金でアメリカに留学中一緒の学校に行ってる。

なんか、変だろ？俺だけアメリカ行つてないとかさ。」

私はうんってうなずいた。

「元々、俺とすぐ下の妹はアメリカにいたんだよ、

親が居ないから2人で里親に育てられてさ、ちゃんと学校も行つてたんだぜ？

なのに急に、爺さんがでしゃばってきてさ。

引き取りたいってさ、言つて来てさ、俺達の意見聞かずに

日本に連れてこられて、日本でいきなり新しい妹出されてさ、笑っちゃうだろ？

それでも結局妹達は2人でアメリカ。

俺はアメリカに行かせてもらえなくて

親戚たらい回し、嫌気がさして、家出して普通に働いたらある日失踪届けだされてたみたいで、警察に捕まるわ最悪。

それで、このマンション。

これ、じーさんの愛人用の家で、いらなくなったら俺用になったみたいだよ。」

じつと下を見たまま鈴は一気に話し出した。
だから、ここに居るんだって思った。

「、、、、高校は向こうで出たんだ、飛び級制度って在るだろ？アナ感じ。」

でも、全部なくなっただって思った。

だって帰国子女で高校までしか出なくて、チャラチャラしてたらほとんどの会社、正社員としてやっとなんてくれないんだよ。

で、爺さんは俺に今経営してる大きい会社を継げってさ、

ナンだよって感じだろ？だったら大学出た後でも遅くないんじゃないかねーのって思った。

何考えてんだろうね大人って。

TATTOOは新宿で知り合った友達に居いれてもらった。

爺さんの仕事なんてつぎたくないし、TATTOOの入った、社長なんて誰も

ついで欲しくないだろ？。

大体そんな感じ。

仕事は、イロイロやってる、風俗店のキャッチとかボーイとかイロイロ。」

言い終わった後、鈴ちゃんはゆっくり顔を上げて私の顔を見た。

「愛ちゃんは？どう俺も、友達として一緒に住む相手の事、知っておくよ。」

鈴の目は真剣だった。

32話（後書き）

鈴の発言で、、終わってしまった、、
小説って難しいですね、、本当に、、ええ。。

誤字脱字はお見逃してください

33話

その言葉に私はうなずいて毛布を抱き寄せた。

「私の家は普通の家だよ

でもね、受験熱がすごい。

お父さんもお母さんもね

いい学校に入っているいい大学に入って、いい職場に就職してその職場は公務員で、国家資格を持ってなきゃ、人として失格なのがうちの。

それを聴いていた鈴は

「前も聞いたよねそれ」といった。

私は軽くうなずいた。

「そうでしょ？大人って変なの。

私ね小学校は私立だったんだ、エレベーター式でさ中学までは行けるの、

小学校に入れたときはスゴイ喜ばれた。天才だって、倍率も高いしそれに入り込めたんだって、喜ばれたの

でもね中学ですっごい成績落として、それからね

すっごい怒られた100点取れなかったら殴られたりね。

でも今までいい子ちゃんだった分、反抗って言うのかな？

もう、耐え切れなくてさ、一緒のクラスで、ダメ組って言われてた里奈と仲良くなって、それで遊ぶようになって、チャラチャラして当然高校もさ、今すっごい馬鹿なところに行ってる。

って、もう行ってないけどね。

だから、世間体とか、テスト点数とか。そういうので殴られたりするんだ。だからヤになっちゃって。そんな感じ。

なんか2人してどん底だね。3人かな変なの。どん底兄弟みたい」

そう言って私はかすかに笑った。

鈴は私をじつと見たみた後に言った。

「愛ちゃんの家って変わってんだね、スキルを学べばいいんじゃないの？

学校って出るものじゃなくて社会に出るときのスキルを取得する場所だろ？

なんでテスト点が100じゃなきゃいけないんだ？変なの

確かに点は必要だけど、スキルをもてたかどうかが一番重要なんじゃない？

それに何故暴力が必要なのか俺にはわからない」

鈴はそういった。

かわった考え方だと思った。

私達には

小さい思考を共有する事ができた。

それでも秘密だらけ。

でも、何もかも共有したらきつとひび割れる今のままでいいんじゃないかと思った。

33話（後書き）

また、セリフで終わってしまった。。。

誤字脱字はお見逃してください・・・；

34話

秘密を共有した次の日

私と鈴はリビングで何故か床に寝そべりながら
数枚の白紙コピー用紙を広げていた。

これから暮らしていく時の定義、

どんなに仲がよかろうが、信頼してようが、ルールは必要だ。

ルールがなければそれは単なる無秩序、いつかは互いに嫌気が差す。

まず家賃は私は電気代、水道代、食費代、管理費、鈴への家賃を含
めて2万払う

今開いている部屋は私が1つ使える。

2人の部屋は各自鍵をつける事、鍵は各自が持つ。

物やお金がなくなったと騒いだり取られたという被害を防ぐために
亀裂が入らないためにも決めた。

たとえ無くした物でも他人を疑ってしまうものだ。

1週間交代でリビングは掃除する事も決めた。

後ゴミはちゃんと分別して、リビングに放置したりしない事が
付け足された。

里奈には私から電話をしてその話をした。

徐々にだけ普通の生活に戻り始めている事がうれしかった。

でも里奈はきつと鈴のうちには来ないと思う、これないと思う。
それが悲しかった。

近くのコンビニについてごはんを買いうついでにバイト情報の無料雑誌

を持ってきた。

もうルールは決めたのだから私はバイトをしなくてはいけないルールが守れなければ当然置いておいてなんてもらえない。

無料雑誌についていた履歴書を取りあえず書いてみた、

高校はとりあえず在学中にしておいた。

私の手持ちにあるのは、

前にバイト用に作った貯金カードとレンタルショップの会員証、学生証だ。

印鑑は、100円ショップかどこかで購入ええいい。

34話（後書き）

何故か詳細を書く私、、、

頑張ってかきます、、

読んでくださってる方スイマセン汗
誤字脱字はお見逃してください

35話

バイトはほかの事をごまかせるキャバにした。

書いた履歴書は破いて、年齢もごまかした、ばれるかと思ったら審査が適当だったから簡単に入れた。

今は昼間や夜とかイロイロ選べるし、楽だから。

メイクして、服着て、お客と吞んで、騒いで終わり。

朝帰って、寝ての繰り返し、親から連絡無し。そのまま1ヶ月過ぎた。

鈴とのルールも案外守れて、2万もきっちり収めてる。

鈴も夜型の仕事で帰ってくる時間は大体同じ。

知らない人ととであって、新しい友達が出来て、その繰り返しが続いていた。

里奈とも普通に連絡を取っていたけど、頻度は減った。

鈴はそれに対してあまりいいとは思っていないみたいだ。でもそれは口にしていない。

私と鈴の休みが被った日に鈴が、里奈のところに行こうと言った。

私は何気なしにあーいいいよと返事をした。

少し、鈴の顔が緊張していたのを、私は見ていなかった。

一緒に歩いていても、電車に乗っても鈴ちゃんは、口数が少なかった。

里奈の家について、ノックするとおばさんが出てきた。

里奈の部屋じゃなくて、居間に通された。

里奈のままは私達に言った。

「ねえ、鈴ちゃんたちが送ってきてくれた日、何があったの？
教えてくれない？」

とても真剣だつて分かった。目が怖いくらいだったから。

私達は口をつぐんだ。

でも里奈のままは諦めなかった。

「ねえ、本当の事を教えて、なんでもいい、どんな事でもいい
ねえ、真実を知りたいの、私はそれが分かるまで、2人とも返すわ
けにも行かないの。」

鈴ちゃん愛ちゃん教えて。」

かすかに里奈のままの声が震えていた。

何があったのか、分からない。

でもそれは想像がつくことで、里奈のままも里奈も

私や鈴が見ていない間、私達が知らないふりをしていた間に、
沢山の事があった。

それは、毎日ズット一緒にいて

十数年も一緒にいる人間だけがわかる、苦しみなんだと思う。

私が、何も言えずに黙っていると、鈴が隣で切り出した。

「すいません、俺とままさんの2人だけで話せませんか？お願いし
ます。」

愛は里奈の部屋に居させてあげてください。お願いします。」

私は始めて、土下座する人を見た。

私もあせつてするべきなのか悩んだけど

それをする前に。

「愛ちゃん、里奈の部屋に言っけてくれる？ジュース、後で持って

くから」

そういった。

私はただコクンとうなずいて、里奈の部屋にノックして入った。

35話（後書き）

やっとココまで来ました。。。汗汗

まだどんぞこーストーリーが続きます。

それがイヤだなんて方、クラゲ2のお気楽ストーリーを
お楽しみください汗

36話

里奈の部屋をノックして、私は里奈の部屋に入った。
変わらない部屋。

でも里奈はやせたように見えた。

私を見て少しおびえたように笑った里奈。

体がズキリズキリと痛んだ。

顔色が酷く悪くて、こけた顔に何キロか痩せたんだと分かった。
たった1ヶ月。食べない日もあったんだろう。

私はあの日の事が頭に何度も何度もフラッシュバックした。

私は里奈の部屋のドアに座り込んだ。

何故だか私がメソメソと泣いてしまつて、

里奈が私を慰めに私の隣に座った。

私はただ里奈に抱きついた。

何も言わない。

ただ静かな空気だった。

あんなに皆で騒いでいられた部屋だった。

なんでこんなに静かなんだろう。

遠くから誰かが泣く声がして、ガタガタ音がして、

鈴がとめるような声がして、里奈と私は一緒に泣いた。

いろんな事が壊れている。

また壊れてしまったと分かつて、ボロボロ涙がおちた。

声と音が収まって、部屋のドアをノックする音がした。

私と里奈は、ドアの前から移動した。

やっぱり無理やり笑顔の鈴君の顔が出てきて、

だいじょうぶだから。

そうだった。

何にも大丈夫じゃない、でも鈴の言葉が願望だったことがわかってた、悲しかった。

その後、私達は何も喋らなかった。

気まずいけど、どうする事も出来なかった。

少しして目が赤い里奈のままがジュースとお菓子を持ってきてくれた。

また冗談を言って私達を笑わせようとしてくれた。

里奈は普通に笑っていて鈴も少し笑った。

私はうまく笑えなかった。

36話（後書き）

誤字脱字もありますがよろしく願います

37話

私と鈴は里奈の家から、帰ってきた。

私はうつむいたままで、鈴は何にも言わずに居た。

鈴のマンションに帰る途中で公園を通った。

私はあの公園を横目で見た。

「ねえ、鈴ちゃん、ママと何はなしてたの」

私は公園の入り口で立ち止って、ブランコをただ見つめた。

あの日の夜は私達が居た場所は、今日見たら小さい子供達が楽しそうに笑って

笑って、ブランコを漕いでいた

頭がグラグラするくらい、まぶしい光景だった。

もうカレンダーでは秋なのに、蒸し暑い残暑と強い太陽の光の中、私は目を細めた。

「愛ちゃん、もう帰ろう。」

そう鈴は私に話してきた。

「ねえ、鈴ちゃん公園の中で話そう、」

私は鈴の手を引っ張った。

酷く手が冷たくて、死んでいるようだった。

公園のベンチに座って私は少し睨むようにブランコをみた、ああ、なんて眩しいんだろう。

「ねえ、鈴ちゃん、里奈のままと何話したの？」

私はブランコとやけに透き通った青空から目を離して地面を見た。少しし湿った地面に蟻の列が見えた。

鈴は顔を背けた。

「別に、ナンもないよ」

何にもないはずなのに。

人間、悪い事があると、口をつぐむものなのかな。

小さくそう思って、口元に薄く私は苦笑いを浮かべた。

鈴はそれを見て

私に苦笑いやめろよと少し注意した。

「じゃあ話して」

私はただ一言鈴の顔をじっと見つめて口を動かした。

鈴の口は空気を求めた金魚みたいにぱくぱくとして止まった。

私は鈴から目をそらさず、残暑にこぼれた汗がひやりと感じた。

もう一度口を鈴は動かして何かを考えたように口をまたつぐんだ。

私は鈴をじっとみてまた、ブランコを見つめた。

子供たちがブランコから離れて親の元へ笑顔で走りよっていく。子供と蝉の声が混じって耳障りに感じた瞬間に鈴がつぶやいた。

「里奈、妊娠してるんだって」

さっきまで気になっていたはずの蝉の音がやんだ様に感じた。何も考えられなくて真っ白だ。

蝉は死んだんだろうか、子供は笑うのをやめたんだろうか。すべてが沈黙して、聞こえるのは冷たい私の鼓動だけ。

37話（後書き）

長くてすいません

読んでくださってる方もありがとうございます

そしてありがとうございます

誤字脱字は許してください

38話

何も聞こえないようで

どくどくと私の心臓は波を打っている。

鈴は動かないまま、いらいらと暑さが体を蝕んでいく。

「な、愛名、お前、もう里奈に関わらなくてもいいよ。」

その言葉を聞いて私は喉をぐくりと鳴らした。

「、、、何いってんの？」

ゆっくり鈴は私の方を見てきた。

目に光がなくて、覚せい剤とかしてる子みたいな暗い目に感じた。

「人助けて、一緒にどん底まで落ちるこというって知ってる？」

助け出そうとしても、落ちてく時は引きずりこまれるように落ちて、

それなのに、結局そいつは落ちたままで、いるって事多い。

ハッピーエンドって、ないんだ。お前、お前さ、お前ならまださ、関わらないで

今離れてつてもいいよ。だってお前俺んちに住んでから、里奈に会ったか？心配したか？

友情も親友も所詮人間関係なんだよ。

俺んちにも別にいてもいいし、でも里奈の事重いんなら、離れてもいいよ。」

喉が引きつって一気に潤いが引いたみたいになって
すっかり声が出なかった。

「は、はあ？、、、」

それだけいって、何を言うべきなのか、何を言えば、この場が変わるのか、私にはさっぱりわからなかった。

「あ、あたしは、里奈を大事に、、、」

鈴がにらむ様に横目で肩を落として見てきた。

「大事、、、か、、、大事とか、大好きとか、誰でも言えちゃうよ。」

そういって苦笑いを浮かべる鈴に、子供のころ怒られて何を言っていたかわからない、そんな時の気持ちになった。

風が吹いて緑がざわざわと揺れ動いている。

「俺、里奈の中絶手術、金とか同意人とか、やるから。」

そういって鈴は公園のベンチから立ち上がった。

日陰のベンチから立ち上がった鈴の背中が、酷く暗く見えた。

38話（後書き）

乱文脱字間違え文などがありますが
お見逃しく下さい

読んでくださっている方々ありがとうございました
キーワード通りバット系に進む予定です汗

39話

鈴と私は蒸し暑くて、重くのしかかる日差しの中、無言で帰ってきた。

エアコンが付けっぱなしだった部屋は、やけに肌寒く感じた。

私は、鈴の言った意味もわかっている。でも結論が出せずにいる。出せないんじゃない、出したら、私が一回でも口に出してしまったら、

それがすべて変わってしまうそんな気がしていたからだ。

鈴は冷たそうな飲み物を私に差し出した。私は何も言わず鈴からそれを受け取った。

それを飲み干して、私は部屋に戻った。ひどく眠くて、そしてひどく不快だった。

「、、、、どうして、こうなっちゃうんだろ」

枕を抱きしめてつぶやいた。

そこに帰ってくる答えはない。みんな近くにいるのに、心はひどく遠くて

そして、現実残酷だ。

私はもやもやした気持ちが晴れずにうだうだこの部屋で、1日が続くのを祈った。

気がつくとき蒸し暑くて、ピピピピという目覚ましの音で目が覚めた。

ぼんやりと昨日のことを思い出して、自己嫌悪と夢ならいい、このまますべてが終わってしまえばいいと少し本気になって考えた。リビングに行くと誰もいなくて、鈴の書置きが目に留まった

『病院、いつてきます。1、2日帰りません。ご飯適当に、家汚すな。鈴』

それだけ書いてあった。

あれは、やっぱり現実だったんだと私は悟った。

病院、そう、里奈の中絶のためにだ。

まるで、現実じゃない、そんな気分だ。

きつと私に起きている事じゃなくて、鈴と里奈に起きている事だから余計に現実味が沸かないんだろう。

へなへなと私は少しその場に座り込んで、床に寝転んだ。

何も無い天井を見てこの暗い夢が終わるように願った。

ボーっとしていると携帯が鳴った。なんだろうと思ったら、バイト先から。

そういえばバイトの時間だ、行かなくてはいけない。

そう思って化粧と服を決めて重たい足を引きずって外にでた。

お酒を飲んで、セクハラなのか欲求なのかそんな客とうるさく騒いで、なだめて

仲間と騒いで、バイトの1日は過ぎていく。

私は、今、あの家に帰りたくないのかもしれない。

答えを出すのが、いやだから。

鈴が帰ってきたのは少し遅れた3日後だった。

39話（後書き）

長くてすいません汗

読んでくださっている皆さんありがとうございます

汗

40話

「ただいま」

鈴はそういつて家に帰ってきた。

何が変わったわけじゃない、でも鈴の雰囲気は確実に暗くて重い何かを取り付いているようだった。

「遅かったね、、鈴」

そう私が言つと、鈴はああ、とそっけない言葉を返してきた。

どうだったとかそういう言葉は私にはいえない。言っていないはずがないから。

鈴はリビングのソファに音を立てて座り込んだ。何かが崩れるように座った。

何も言えず、私は客が来たかのように鈴にお茶を出した。

鈴は私が出したお茶をじっと見た後、手にとって少し飲んだ。

私はソファには近づけず立ち尽くしたまま鈴を見つめ続けた。

何が変わったか、何も変わっていない。でも渦は何もかも飲み込んでいるというだけ。

里奈は、と私はやっと声に出して鈴に聞いた。

「里奈はもう退院してる。」

「そう、、、手術長かったの？」

「いや、日帰りぐらいで済んだよ、手術つて。」

私はただそれを聞いてうつむきただけだった。

なのに鈴はたぶん里奈のところにずっと居たんだろうと思う。

鈴は、多分この国で馬鹿みたいに不器用だ。そして私は、全てから

逃げている。

気まずいその重い空気に私は耐えられなくなって、寝室に行こうと歩き出した。

「愛名、里奈さH I Vなんだって。俺も検査しろって言われたけどさ、

俺SEXしてねーし。笑っちゃうよな。。。

なあ、愛名、俺にどうしろってんだろな、神様って絶対いねーよな。馬鹿みてえだな俺達。」

私は目からぼろぼろと涙かでた、それを聞いて悲しいのか、里奈が哀れなのか、

鈴が哀れなのか、鈴や里奈から離れようとした自分の浅はかさに腹が立っているのかわからない感情が足元から胸までぐちゃぐちゃと広がっていくのを感じていた。

こんな世界なんて、本当に滅びてしまえばいいとただ強く願った。

私はその場に座り込んで子供のようにただ泣きじゃくった。

鈴は何も言わず、自分の寝室に帰っていった、その後壁を殴る音が数回聞こえた。

その日私達は顔をあわせなかった。一緒に部屋にすんでいて、一緒に空間に存在しているのに。

朝おきてリビングに行くと、鈴も同じようにリビングに来る途中だったらしい

私達は酷く困惑した、会いたくなかったのだと思う。とても気まずく感じた。

「おはよう、愛ちゃん」

「おはよう、、、」

私達は気まずいままソファーに座り込んだ。

鈴も私もただただソファーとセットの白いテーブルをひたすら見続けた。

一瞬鈴がこちらをじっと見た後に

「里奈に会いに行こう。」

そう強く私に言った。多分鈴は言い出したらきかない。

私はただ軽くうなずくだけだった。

40話（後書き）

まだ、、続くんですスイマセン

最終話は何気なく書き終わっているんですが

つなぎの話がどうしても下手で、、スイマセン

読んでくださっている方ありがとうございます

41話

ただ鈴の目に強い色が浮かんでいることはどんなものより確かだった。

私はもやもやとした気持ちの中でだらだらと服を着替え、支度をした。

私は里奈の顔を見れるのだろうか。どうしたらいいのだろうか。私の頭の中にぐるぐるとそのことだけがめぐるっていた。

鈴が部屋をノックして来た、どうぞと私が言つと

支度はできたのと聞いてきた。とりあえず、うなずいた。現実と向き合うと言つことは酷く過酷なのかもしれない。

昔はよく通つた道を私は鈴と一緒に歩き出した、あの日の公園を通つて、そしてまた電車に乗つて、私達はずっと何も話さなかった。

電車の音の中で何を言うわけでもなく私達はただうつむいたり、窓を眺め続けているだけだった。

少し懐かしい、里奈の住んでいる団地につくまで私と鈴は少し手をつないで歩いた

意味なんてない、どちらが手をつなごうと言つわけでもなかった。ただ、私達は酷く不安だっただけ。今が本当はとても怖い。

里奈の家について私は玄関をあけて、すいませんといった。

中から里奈のまが出てきて、少し私達に笑つて里奈は部屋に居るからあつてあげて。

そういつてすぐ引つ込んでしまった。

ままもきつと、不安で怖いのだろうかと思う。

私はドアをノックして里奈の部屋に入った。

里奈はおびえた様子だった、目の下のくまが痛々しかった。

私は目が暑くなるのと胸が押しつぶされそうになった。

でも私なんかに出来ることは1つもない。

私は目をそらそうとした時鈴が喋った

「、、、病気のこと、言ったから、大丈夫。愛名もわかってんだ大丈夫だし。」

それを聞いて少しだけ里奈は微笑んで笑った。

あのね、そう切り出した里奈の声は酷く震えていて
なかなか次を喋らなかった。

小さな沈黙

その一瞬が酷く長い世界に感じた。

鈴はただ黙って里奈をじっと見ていた。

数分たつてからやっとまたガタガタと震えた声で彼女は喋った。

「薬、買うのって高いね。あたしどうしよう。鈴ちゃんにお金借りてるの、ば、馬鹿だよね、お母さんに苦労かけて、なのに、HIVで治らない病気で」

酷く悲しい事を言っているのがわかった小さい子供が声を殺して泣いている様に私は見えた

私は里奈の頭をなでた。私にはそういうことしか出来ない。

「どうしよう、あ、あのね、死にたくないよう、死にたくない、普通になりたい」

そう里奈は言っつてうずくまるように泣き出した。

子猫がうずくまるようにうずくまって、里奈はとても小さく、心細く見えた。

私はただ里奈を抱きしてて、ただ頭をなでてあげるだけだった。

41話（後書き）

え、もしかしたんですが、あまりにも筆不精（↑ちげーよ）正直、何度かこの作品自体を消そうかと、とりあえず消さないで連載するのですが、私の気まぐれで全削除も有り得ます。

ただ完全に書き終わってからするつもりで居ます。。。 （読んでくださってる方も居るようなので。。。 スイマセン）

42話

里奈の家からの帰りに鈴は何も言わなかった。

公園をまた通って、何事もなかったように時間も私たちも過ぎて辛かった。

私も喋るとつらい事ばかりがこぼれて泣きそうになった。

神様は居ないし、不幸だと思っててもこの世は誰も助けてくれない。

だから私たちは誰にも言わないように口をつぐんでいるんだと思う。

里奈はどうなるんだろう、鈴はどのくらいお金を貸したんだろう、薬って高いの？

ねえ、なんで誰も治る薬を作れないの？

堂々巡りをしても私の感情は落ち着かなくて荒波に打ち付けられて身が裂けていく気がした。

この世界なんてなかったらいいのに。つらい事なんてなかったらいいのに。

里奈も私も鈴も周りも、全部夢だったらいいのに。

現実なんかなかったらいいのに。

全てから逃げれたらいいのに、でも逃げたら私はもつと後悔する。

もつと大事なものも大事な時間も大事だった思いでも全部なくす事なんて出来ない。

暗い並木道を少し歩いて、私は鈴に聞いたばかりの事だと思っけど私の心は狭くて

鈴を傷つける言葉しか出て来なかった。

「ねえ、里奈の薬は高いの？里奈は死んじゃうの？」

鈴はじつとアスファルトの地面を見つめて歩く速度を緩めた。

「何でそんな事聞かな？」

ただ箇条書きの文字を淡々と読んだような鈴の声を聞いた。

私は並木道に植えられた背の低い光沢のある葉を茂らした木から葉を数枚抜いた。

「聞きたいから。」

それだけ私は話して少し鈴より早くあるいた、鈴を通り過ぎるとき彼の手が強く握られているのを見た。

これが、現実でなかったら、リアルじゃなかったら。

いいのに。

43話

アパートに帰ってきた私たちは薄暗い玄関に入って電氣をつけた。

ダイニングのソファ―に座って、私はもう一度鈴に聞いた。

「ねえ、里奈の医療費はいくらなの。鈴ちゃんだけしつてて私は何も知らない。」

里奈は死のぬの？何かいつて。」

鈴はソファ―に目を向けて私を見た。

そのまま私も鈴も動けずに、少し時間が過ぎた。

「里奈の医療費は、あいつんち貧乏だから保険とかそういうのが払えないんだ、だから薬代は高い」

「だからいくらなの？どうなの？」

私は何度も同じ意味を鈴に責め続けた。

「だから、1ヶ月10万はいく、もし薬の金が払えなかったら里奈は発病してそんな持たない」

鈴はそういいながら自分の部屋に歩いていった。

声は震えていて、きつとヤケクソに近いんだと思う。

部屋のドアが閉まる音がして、私は孤独になった。

里奈が死んだら、私の大事な友達も思いでも流されてしまつて、楽になるかもしれないけど

それにはあまりにも大きすぎる事だとわかっていた。

でも何も出来ない。それだけがただ今の真実でしかなかった。

鈴にも私にも何も出来ない。

時間ばかり無駄に消えていつて、大事なもので一緒に持っていかれてしまう気がして酷く怖かった。

死ぬとかわからないでも、縁を切ったとかじゃなくて、その人まで居なくなるって事が怖かった。

こんなに何も変わらないで居て欲しいのに、きっと私たちも変わってしまう。

きっと本当に笑っているときでもおもりを心に深く沈みこませていくんだろっと思う。

44話

憂鬱な夢を見た、雨の中私は海に浮かんでいて、孤独だった。雨は顔を濡らして、海は私から音を奪って、波はただ厳しかった。

ゆさゆさを体を揺らされて私は起きた。

鈴が私を起こしたらしい。目の前には水が入ったコップを差し出された。

「水飲んで起きて、話すから」

そう言って鈴は私を起こした。

その言葉にぞつとして私は目がさつと覚めた。

鈴は向かい合いに座って、ただ下を見ていた。

「昨日俺そんな持たないって言ったけど、薬ちゃんと飲んでればあいつも俺らみたいにならずと生きられるし、また遊べるし、3人で居られるから、あんな言葉お前に言われてかつとなっただけで言ったんだけなんだ。ごめん」

私はコップを握りしめたまま、その言葉を聞いた。ほんの少しの安堵とでもきつと変わってしまったことを私はわかっていた。

どんなに変わらないといっても時間は変わってしまうから。

「私もごめん。言葉が、わからなかった、から、そう、言っただけ」言葉を出すと目が熱くなって涙が出そうになった。そういったまま私はコップの水を飲んだ。

鈴はそれをそつと見た後にもう一度寝るわといってまた部屋に戻っ

ていった。

時間はもうすでに午後になっていた。まだ日差しはジリジリと暑そうで汗がじめじめと苛立たしかった。

シャワーを浴びても私の心は酷く乾いていて、メイクをしても疲れていた。

鈴がまだ部屋から出ないうちに、財布から3万を出してメモを添えた

『医療費に』

そう書いて

リビングのテーブルに置いた。

45話

そのまま私は仕事に出て髪を巻いて、ドレスを着ておじさんたちに笑って、タバコに火をつけて、お酒を飲んで盛り上げた。

それが私の仕事だから。

きれいにしたネイルも、買ってもらったバックもどれもあまり綺麗でもなくてまた疲れた。

新作のバックが出たんだからプレゼント、このシャンパン一緒に飲もうか？誕生日なんだってね、

おねえちゃんみたいにかわいかったらなんでも買ってあげる、

お小遣いほしいならいくらでもあげるよ。今日は同伴しようよ、アドレス教えて。

繰り返される言葉にこびて笑って私はどんどん汚れていくし、私が欲しかったものは何もなかった。

バックも同じ物を何個かもらって1個残して売ったし、指輪も、人形も、服も、時計も全部同じに質屋とか携帯サイトで売った。

自分があげたものだと思って、おじさんたちは喜ぶけど実際誰が買ってくれたのかなってどうでもいいことだった。

お店は女の子同士の競争や亀裂、いじめ、毎日がゆっくりと傾いて私が壊れていくのがわかっていた。

でも、生きていくのも同じだから私は仕事をしている。

でも一度は離れた里奈の顔が何度も何度も浮かんで、お店が終わってからトイレで吐いた。

里奈はどうしているんだろう、何故私は里奈から逃げているんだろう。

鈴は言ってたジャン、普通に暮らせるって。

なのに私の心はゆっくりと深みにはまって行くみたいだった。

お店のおにーさんに車で鈴のアパートまで送ってもらった。

46話

薄暗い玄関を抜けて、部屋に入ってベッドで眠った。鈴が帰って来た音がしたけど、私はまた深く眠った。

私と鈴はそれからしばらく同じ部屋に住んでいるのに、また少し前みたいに、顔をあまり合わさなくなった。

ただ私は鈴が寝ている時間に、医療費にとメモをかいってお金を置いて、仕事に出かけた。

ふと学校はどうなったんだろうかと思っただけど、もう何ヶ月も行っていないから退学だろうなと思って考えるのもやめた。

実家にはもう一度も帰っていない。もう私は帰らないんじゃないかと思う。

里奈には最近連絡も取る、時間を見つけては遊びに行くし、里奈はまた普通に帰って楽しくやっている。でも鈴にはたくさん借金があるからがんばってバイトしなきゃと言ってた。

里奈は近くのコンビニで働いているらしい。

また少しづつ私たちの生活が戻っている。

そう思った。

よかったと私は胸をそつとなでおろしていた。

また少しづつ私たちは戻っていきける。

仕事帰りにキャバクラの仕事を私は辞めようかと思って適当に求人雑誌を持ってきた。

玄関をあけると部屋が明るかった。

夜に帰ったら鈴がリビングに居て、久しぶりに顔を見た気がした。

鈴がこっちを見た後にすぐ目をそらした。

「愛ちゃん、里奈、今の薬きなくなっただって」

薬が効かない。

それって、どういう意味なんだろう。だって鈴は薬があればちゃんと生きてけるって暮らして行けるって

言ったのに。

だってそう言ったのに。

47話

「鈴、だって薬が効かなくなったら、駄目になっちゃうんじゃないの。」

そういうと鈴は私を見ないで反対側を向いたまま

「別の薬があるから大丈夫だけど、あいつのHIVは型は変わって、薬が効きにくいからもしかしたら、駄目かもって医者に言われた。」

それだけじゃなくて、HIVの型が2つあって。薬も選ばなきゃいけないって言われた。」

ねえ、嘘だと誰か言ってくれたらいいのに。

ニユースで早く、治す薬が、薬が出来ましたって早く流れたらいいのに。

私の声はもう言葉に出来ずに、目からボロボロと涙が出て、傷もないのに胸が酷く痛んだ。

「でも次の薬も次の薬もまだあるから、きっと大丈夫だから、薬も今は強くなって死ぬ奴ってスゲー少ないんだってでも、もしもってあんじゃん、覚悟はしとけてお前に言いたかっただけ。」

そう鈴は言っつてずっとそっぽを向いたまま動かなかった。

鈴はきつと泣いている。ただ明るい中で見せないように向こうを向いているだけ。

「ねえ、里奈は知ってる？」

「知ってるよ、一緒に聞いたから。お前に話そうって一緒に決めた

から。」

ただ涙が出て、アイメイクとマスカラが混じって目から汚い私みたいな黒い涙が落ちた。

鈴の声も涙声で、グズグズと聞こえた。

「なあ、癌とか、普通の病気は家族に言うのに、HIVは本人に言われてさ。

本人だけが戦ってる孤独な病気じゃね。

前検査にいったらさ。なんかそんな行為したからでしょとか

あいつに言った医者がいたんだって。里奈が後で泣きながら教えてくれて

クズばっかだな、何にも知らないくせに、最悪だよな。」

そう鈴は言ってソファーには小さな小さな水溜りが少し見えた、私は鈴を無駄に抱きしめて髪の毛をぐちゃぐちゃにした。

2人で泣いた。

私たちは、ずっと家族だから。一緒にいたいと思った。

ここに里奈も居たらいいのに。

ここが全ての世界だったら、誰にも何も言われなくて、誰かに馬鹿にされたりしないでいいのに。

48話

仕事に行く前に私は里奈に電話をした。

「ねえ、里奈、里奈も一緒に住めばいいじゃん。ママも呼んでさ。皆で暮らそうよ。」

私はただ里奈にそういった。

「あのね、私、やっぱりまだママと住みたいの。私きつとあんまり長くないと思うから。きつと幸せな家庭とか、好きな誰かとももう一緒にベットにもはいれないから

。だから、ママと一緒に居させて欲しいの。ごめんね。誘ってくれてうれしかったよ。」

その言葉にも悲しくて私は涙が勝手に零れた。

でも声は普通でまるで私の声と心が別の物になったみたいに感じた。わかったごめん

そう言つて電話を切った。

それでも私に溜まった汚れた水は目から次々に落ちていくだけだった。

里奈の声を私はある意味初めて聞いた。

私は逃げていたんだと闇がしつかりと伝えて来た。

塩水で前が見えないからといって、音はどんな中でも聞こえる物だから私は意味をしまった。

携帯を私は強く握り締めた。

ひどくりビングが広がって私が小さなありにでもなったような気分だった。

次の日になって鈴が里奈を連れてきた。

私はしばらく里奈と会わないのだろうと思っていたのに。

鈴はそういうことを一気に飛び越えて行動する。

どんなことも思い通りにならないことを彼はあっさりとおしえてくれるのだ。

それが悪いことであろうとなかろうと同じ事だというように。

私は何もいえなくて、ただ里奈の目を見た。

やっと乾いた口から出たのは「おはよ」その言葉だけだった。

鈴はやけに笑っていて、それは気がつかないやつにはうれしそうに見えただろうと思う。

きつと、つかれも笑っていることを知った人間の性なのかもしれない。

夜の世界は人を簡単に変えてしまうものだから。

リビングのソファーに鈴が里奈を座らせた、その後私の目を見て真剣にそして、空のように笑った。

「俺里奈と結婚するわ。」

それだけのことだった。

でもね。鈴それはきつと里奈を傷つけるかもしれないよ。

私はそつと心の奥で悲しく、ゆっくりと思った。

49話

「そうなんだ、でどーするの？」

私は意地悪なのかもしれないと思ったけどこの質問を出すのをやめられなかった。

意味なんてないのかもしれない、私はただ波に突き動かされているだけのだから。

「いや、何も考えてねーや」

そうおき楽そうに鈴はしゃべった。

それでも鈴の目はきれいな空のように空っぽだった。

私はそうなんだーてか雑誌とか調べよとただほざいた。

鈴、あんた傷つけるよ。思っただけの言葉が私の新しい傷になったように心の中で何度も痛んだ。

なんでかは私にもわからなかった。

きつと意味をもてないんだと思う。ただ漠然と、私は自分の考えをおろかだと思った。

里奈は、また少しやせた。それがまた私の心を蝕んでいくようだった。

悲しいというのはこの感情のことを言うのだろうか。

何もかも、全部リセットできないのだろうかと何度も里奈を見るたびに私は思い続けている。

それは彼女を否定する言葉になるのだろうか。

その考えを消そうと私は言葉を切り出していた

「ねー結婚式とかすんの？」

そうすると2人はそつと目を合わせて

首を振っていた。

「いやーお金少なくてサー今は無理だよー。まあいつかね」

鈴はそんなことをいった。

お金がなければ、HIVの薬は買えない、それが私たちにただ振っ

てくる現実なのだろう。

どんなに嘆いても、それだけが目の前の真実なのだ。

そうなんだーと私は笑ったつもりだったんだけど、私はうまくそのとき笑えたのだろうか。

心配に私はなった。

明日指輪を買いにいくといった、鈴と里奈を静かに私は見つめた。

それがなんだかやさしくてひどく悲しく感じて涙が出そうだった。

私は最悪な同情を彼女に抱いているのだろうか、だったら私は最低な人間だと思う。

私は今日も変わりなくだらりと生きていて
酔っ払ったオヤジの顔を無理に見て笑顔を作っていればそれでよかった。

ドレスの胸元にやけに目を向けてくるだけでとりあえずちやほすればいいだ。

トイレの前でタオルを持って待っていると1時間は出てこない客がいて

そこに私がなぜ立っているかもよくわからなくなった。

ぼんやりじつと床を見ていると床がうごめくように見えた気がした。
面倒な客はトイレでタバコを吸った後にだらだらと出てきて
席に戻って少しした後、店から出て行った。

お目当ての子がいたらしいけれどそんなことは私にはどうでもいいことだと思う。

仕事帰りに私はくだらない服を脱いで、酒臭い他の子と帰らずに
ネカフェに行った。

その日は鈴のマンションにはかえらなかった。

悲しい気分になりそうだったから。

携帯の電源も落としてパソコンにだらだらと向かって、
剥げかけた付けまつげをむしった。

会計を済ませてから外に出るとやけに日の光は眩しくて
頭が痛くなった。

サラリーマンやOL、夜の仕事なんてしたことないだろう人間が
溢れかえった世界に

本当に私は頭痛がする。

鈴と里奈は元気だろうか。なぜだか薄っすら私はそう思った。
思ったことに意味なんて私にはない。

気がついたら足を部屋に向けていた。

電車でサラリーマンにもまれて、肺がつぶれそうだった。

そんなことはどうでもいい気がしてあの公園の前まで歩いてイライラと立ち止まって。

なんの理由もないけれど遊ぶ子供を見てそっとにらんでいた。

無邪気に遊ぶ姿と私たちにつらさの差を見て本当に腹が立った。

51話

無性に感じた怒りに誰かを殴ることがあればこんなことなのだろう。でもそんな事ができるほど私はまだ壊れていないし、

酷く重い冷たい水に侵食されている体ではただ無性に覚えた怒りに立ちすくむだけだった。

あの公園がやけに太陽に照らされて屋気楼に満たされたように見えてとても憎かった。

時間は簡単に私たちに時間を奪っていくばかりで、もう奪われたり私や里奈や鈴が憎んだ時間はもう返してもらえない。簡単なことだろうし、そんなことはわかっているのに

何度も何度もその場所を見るたびに私は同じことを何度も何度も繰り返して考えて。

もうまっすぐの線には戻れないままループする曲線たちに入り組まれてしまった気がしている。

私はもう一度冷たく冷えた体を引きずって不審な瞳で見つめてくる子供たちを睨んでから

また鈴のマンションに戻ることにした。

寒い寒いときつとその外気との差を感じながらじめじめと張り付く熱さに体を纏わりつかれながら

ゆっくりと歩いていく。

そこからは気がついたら私は酷く汗をかいたままマンションのドアを回していた、ゆっくりと。

鈴と私のパンプスじゃない黒い少し後ろがこすれた靴があった。

ああ、そうか2人が来てるのね。

そうっすだけ思っで静かにドアのキーを閉めて、靴を脱いで部屋に入った。

自分の部屋に戻ろうと歩み始めていると、洗面所の方から鈴の

おい！という言葉が何度か聞こえた。
なんだか血の気がそっと、わたしから引いていくのがわかった。

52話

足が床に張り付いて凍りつく前に私の端は洗面所に向かって走り出していた。

大丈夫かという声が何度も洗面所のドアの向こうから聞こえてくる。そのドアを乱暴に開けて開くと、里奈は鈴に抱かれたままずっと嘔吐していた。

私の足はずっとカタカタと震えてどうしていいかもわからずに真っ白になった頭だけとその映像を積み目続ける私の瞳だけがリアルとして残っているようだった。

割れたガラスみたいな瞳が私を刺すように振り向いた。

「愛名、おい愛名、コップと水もってい」

そう言われて怯えたように震え続ける足を振り切るように走ってキツチンから水を入れたコップをまたガタガタと足を震わせながら私は運んでいった。

少し嘔吐がおさまった里奈は洗面所の床にペツタリと張り付くように座り込んでいた。

ぎこちない動きで私はそっとタオルをかけられた里奈に水を差し出した。

ゼイゼイと呼吸が聞こえ背中が丸まりやけに苦しそうな里奈は少しこつちを見上げて

ありがとうといった。

その言葉が私には酷く痛かった。弱弱い。

私とカラオケに行つて遊んで、メールでふざけた話を繰り広げたり絵文字を交換して遊んでけんかしてまた遊んでた里奈はどこに行つたんだろう。

酷く胸が焼き焦げるように痛んだ。

53話

そつと受けとつた水を小さく飲んでいる里奈を見てそつと目をそらした先に

鈴の小刻みにでも気がつかれないように後ろに回した手を見た。

誰もが何もかも夢でこれが現実ではないと信じさせてほしいのだと白い真つ白くなっていた頭にそう焼きこまれた。

足をそつと後ろに引くとちくりとかさつく何かが足に刺さった。

そつと足をよけると開けられた薬のシート、書いてある文字で読み取れるのは250の字

シートは3つ飲まれた後があつた。もう250の数字他にもかさかと銀色に鈍く光る薬のシートだけが見えていた。

目からぼたりと熱い雫が私の頬を通った。

それで何か変わることがあるのだろうか、ただ私は無力だった。

鈴が細かい声で私につぶやいた。「ソファーに毛布用意しとけよ」

それだけ言つて、鈴は振り向いたりしなかった。2つの事は誰だつて出来ない。

頭の中は里奈はエイズだつて聞いたけど、そんなに早く進行する訳ない。そう分かつてる。

それでも、私の頭は混乱してばかりだ。もし強い波に叩きつけられたなら私の脳はこうやって揺れるのだろうかクラクラと。酷く悲しい。ソレだけが私の今の本能を揺らしている。

私はまた、逃げるのだるか。逃げて、どこに漂うのだろうか。

鈴も、里奈も、家族も全部見捨ててドコに行けるって言うんだらう。かさかさと足に刺さるシートを見ないように私はリビングへゆれるように歩いた。

クローゼットから閉まっていた、薄い毛布を二つだしてソファーに敷いた。

夏でもきつと冷たい水を飲んだから冷えるだらうと思った。

53話（後書き）

びつくりするほどお久しぶりです、もはや読んでくださっている方は少ないのでは。。。汗と思いつながら、、

実は1度この小説をちよつと出版社の方に送ったのですが、その後私自身限界な事がありすぎて、そこから連絡をノータッチでした。その頃の担当さんごめんなさい。

1度電話までくれ、資料を送ってくれた2名の社員さん本当すいませんばつくて、、汗

いやもう記憶の片隅にしかないだろうなーと思ってるんですが。

とりあえず、仕事にも就いたり、どんどん回りが変わって、居なくなつて、本当セツナイと嬉しいの繰り返しでした。

8時間動労休憩なしとかで働いてる気がします。でも楽しいです。読んでくれている皆様も本当にありがとうございます。

毎年数回の更新で、ひどい文章でも読んでくださっている方本当ありがとうございます。

まだ続くと思います。本当とろい更新ですいません。

54話

鈴が後ろから、里奈に肩を貸して歩いてきた。皆して顔色が悪くて、ただ青かった。

するりとした毛布を一枚ソファーに敷いて、ゆっくりとソファーに沈みこんでいく里奈に私はそつともう1つの毛布をかけた。

少し弱そうな笑顔を見せる里奈に時折、水をかけられたように胸が冷えていくのを感じる。

何故だろ、何故こんな気持ちなんだろう。

外からはココとは違う生きた音が聞こえる、ここは、静かな人の息が聞こえる。とても冷え切った息が。

少し白い天井を見た。何も無い天井がうらやましいと思った。

人が皆真つ白な紙だったらいいのに。そう思っても、人は人だから変わらないのは私は分かっているのに。

また里奈と鈴に目を向けた後私は部屋に戻ってただベットに沈みこんだ。

本当なら看病とか、一緒にとか、沢山、沢山あって、きつと逃げた私はまた後悔するのだろうと分かっているのに。

ただベットに深く、深く沈んで、そのまま何処かに消えてしまいたいと願った。

暗くなった頃に、目が覚めた、覚めたのにずしりと重いままの頭だった。

酷く疲れたような気がして、仕事に行く気さえしていなかった。

きつと私はこの不幸にじつと沈んでいるだけなのだろう。

それはただそこから前に歩き出すことから逃げているだけなのだろう。

もう私も逃げる場所も、逃げる時間ももうないというのに。

本当はお金では解決しないと分かっている、何もかもが。

55話

今度こそ逃げずに待っていていられるだろうか。沢山の事に。

私はそれを誰かに任せて待っているのだろう。誰も迎えに来ないし、結局私の足は私の物、だから私しか立てないのに。

ゆっくり重みのある頭を上げた。ドアの隙間から声が聞こえた。

鈴と里奈の声だろう。

少し蛍光灯のジジっという音が聞こえた。とてもとても静かな中で2人は喋っていた。

ソレがとても悲しかった。そして幸せそうだった。私には得られないなにかを少し、ほんの少し見たのだと思う。

里奈の元々持っている明るそうな声が聞こえる

「副作用見たいなの、他に胃を保護するやつとかあったんだけど、薬もらいに行けなくてそれだけ飲んじゃって」

「それだけじゃダメなんだろう？一緒にいきましょうか？」

「保険切れてるから、すごく高くて、もうすこし我慢しないとね」

保険、私は子供だけど、きっと保険が切れたって事は里奈ママも大変なんだろう、切れたってことは何万もするんだろう。それだけ私も少し分かった。

私も保険なんて持って居ないけど、病気なんてしてないから。忘れていた。

私は何が出来たのだろうか。そう思って、汗で少し湿った枕に顔を押し当てた。

少しして2人の話が笑い話に変わってきたあたりで、やっと私はベ
ットから抜け出すことが出来た。

頭が重い。それだけ。

仕事に行こうそう少し思って、ドアを開けた。

酷く蛍光灯の放つ光がまぶしくて。目が回りそうになった。

56話

「愛名大丈夫なの、ふらふらだよ」

「うん、大丈夫、昨日お酒すごく飲んじやったから。ありがとうね」

そう会話をして私はシャワーを浴びた。

最後、水を被った。冷たくて歯がカチカチになった。本当に目が覚めたらいいと思った。

タオルで身体を包むと酷く暖かく感じた。ドライヤーで髪を乾かして、化粧水を付けて、

化粧道具を引っ張って、メイクをして。

当たり前の動作をして、部屋に戻る時仕事行くからと元気にいっておいた。

そうしないと、やっと上げ始めた私の足は簡単にまた立つ気をなくしてしまうから、

そこからそれなりに来て行けそうな服装を選んで、それを着て。ソレがとてもむなしかった。

またあの部屋を通って行って来るねと言った。2人とも笑って送り出してくれた。

ヒールの高い靴を履いて、歩いて、公園を通って、酷く薄暗かった。きつとこの公園にはふさわしいのだろう、その暗さが。

繁華街を歩いて、ホストに声をかけられたのを愛想笑いかわして、その途中で何故だか私は求人誌を取った。

つい数日前も私は求人誌をつかんだばかりだったのに。

ソレを白くてどうでもいいハートのキーがかかったカバンに押し込んだ。

そのままお店のバックに入って、化粧をしなおして、そして髪をアップして、ドレスに着替えて、

どうでもいい場所にお金をもらいにフラフラと出て行った。
愛想笑いと、どうでもいい会話で笑って。私は本当にドウデモイイ
のだろう。

57話

笑いつかれて頭が着いていかなかった時に仕事が終わる、最近の夜の街はとても静かだ、規制が入って営業は12時までそれ以外は中に残っている客が飲み終わるのを待っているだけ。

ばれたら罰金。どこもそう、だからといって一度入った世界はそうたやすく昼の時間には戻してくれない。

それは当たり前なのだろう。普通の人間が遊びで来る場所に居る人間は、所詮どこに行っても通用しないと思われる。

甘い事を言える場面は昼にはない、それが分かりにくい場所なのだろう。

それが私にも少しずつ分かってきて居る。

私には上に居続けるだけの知識がない、若さだけで売っていてその若さがなくなった時に次はあるのだろうか。

着けまつげが取れていないか、時々気にして、お金が入ったらエクステを着けて。

私の何もない顔をきつとココに来ている男達は喜ばないだろうし、普通の私は要らないのだろう。

笑って、飲んで。そこに次の先は大して用意されていない。

もし私が夜だけで過ごすのならあの家族と縁を本当の意味で切るのだろう。

彼らにとって私はその程度の存在なのだろう。誰も私を探したりしない。

くだらないメイクと髪色、高いヒール、短いスカート、胸の出る服そんな人間が家の近くに歩いて入ってくることは家族のくだらないプライドが許さないだろう。

私のかばん、サイフ、身分証、私を証明する沢山の物、ソレを取って、もう二度と会うこともないように。

それが私に出来るのだろうか、浸かり切った不安や不幸の中で満足

しているだけの私に。

幼かった私が両親のために入ったきつと高校は退学だろう。それとももう退学届けを出されているのだろうか。

それなら、それこそ彼らにとって私は何もないのだろう。

生きている事すら、もう彼らには見えないのかもしれない。そうふと私は上の空で思った。

解けて揺れて、何処かに流れていけたらいいのに。

それでももう少ししたら私はきつと、あの家に帰って何もかも無くして帰ってくるのだろう。

58話

仕事が終わる時間には、数人の女の子。

送り迎えには最近お金が掛かるらしくずっと彼女達是不満を言っていた。

4千円くらいタクシーつかうよりマシでしょ、だったらこんな仕事しなきゃいいのに、そう思って少しだけ笑った。

時々お店の子と愛想で喋って、それでも彼女達と仲良くなることはないだろう。

彼女達がよく握っている携帯には最近私と他の子の悪口が入っていることだろう。

そういえばホスト絡みのネットのチャットやら何ならで、私の名前の中傷があるらしい。

だからどうしたのだろう、私は彼女達の好きな男は取っても居ない。たまたま呼び止められて明るく笑ってお店のように話をしただけ。

私はあの固められた髪に顔をうずめたくないし、本当は強い香水も大して好きではない。

誰と寝たか分からない人間には正直興味もない。それだけ。きっと気に食わないのはそういうところなのだろう。

外では明るいのに、中ではあまり喋らない。興味がないんだけど、彼女達にはそうは見えないのだろう。

男ばかり金を狙ってるように見えるのだろう、でもそうでしょ？金を落とすのは客の男ばかりなんだから。時々まぎれてくる女性

がお金を払うわけではないでしょ。だから、何だっけ言うのだろう。

誰の男を取った、寝た、お金を払わせた。汚い、性病がある、そういう類の言葉が載っているらしい。

その文章で私の生きた時間を簡単に表せるのね、そう思うといっそ笑えるくらいだ。

私だって寝る男は選ぶ、それに私はこの仕事を始めて誰とも寝ていない、正直性病もない。

でも私の名前で書かれたのだからきつと皆私の事だと思っのだろう。人は簡単な生き物だから。

大して美味しくもないタバコをいらいらと吸った。すつと眩暈のようなくらみが来た。

このまま、このままで入れたらいいのに。そう思っのにイライラとタバコを灰皿に押し付けた。

59話

送ってもらって4千円を運転していた、真っ黒な瞳の男に渡した。酷く疲れて、目がくぼんでいた。送っていく仕事だっただけでもない。後ろの席の子が吐いていたからその清掃だっただけなのだろう。

まだ悲鳴のような汚いという声が聞こえた。黙って私は真っ暗な公園の前で降ろされた。

公園に1人降ろされて怖くないわけじゃない。でも私はどうでもいいと思っているのかもしれない。

もし、里奈をレイプした人間が出て来たのなら、私はどんなことをしたって殺すだろうと思う。

私が今度は醜いものになるだろうけど、今の私の汚さとそいつを殺す汚さのどちらが汚いのだろう。

後で、仕事場の近くの防犯ショップでナイフでも買おう。

可愛いバックの中にあるなんて思わないだろうし、警察は職質を普通はしない。そんなこと当たり前。

もし、そいつと顔をあわせる日が来るのなら、どんなことをしてもいい。殺そうと私はそっと思っただけ。

思っただけで、きつとそんな機会は訪れないだろう。私の本能が告げている。

殺せないから、殺したい、死んでほしいと願う、里奈の闇と同じ以上にズタズタになって消えてくれればいい。死ねばいい。そう強く願う。

それはきつと醜いのだろう、私は今里奈より鈴より、薄汚くとても惨めだ。

見かけだけが美しく飾られて、中身は下水より汚らしいのだろう。そんなことも知らずに私を指名してくる連中さえ酷く醜く思えた。

ぼんやりとまた鈴達が居るマンションにふらふらと帰った。
鍵を開けて灯っている電球がとても美しく見えた。

私とは違っのだろう。私は何故無機質なものに生まれなかったのか。

60話

鈴と里奈はリビングには居なかった。きつと鈴の部屋に居るのだろう。

痛くなった足から高いヒールの靴を抜き取って、そろえて下駄箱にしまった。

素足で踏みしめるフローリングに足が熱を持ってじくじつと痛むのが分かった。

そのままシャワーを浴びに向かった。2種類のクレンジングできつく着けられた化粧を拭っていく。

滲んでいくアイメイクがとても汚かった。

クレンジングで落とすと、誰もほめてくれない顔に戻る。眉毛は書くのに邪魔でほとんど抜いてしまった。

睫毛も着け睫毛のために短く切った。

そうして化粧をした方が指名がいいとわかったから。

変わりに2重にしたつけ睫毛を張って。

無かったら2重に見えるようにわざと切った睫毛にまつげエクステを着けてもらいに行った。

そうしないと、上にはいけないし、わざと可愛い振りを沢山して。お金を貰って。

そつと、ため息が漏れた。

すっぴんになって、シャワーを浴びて、着替えて。さっぱりしたけれど、1人で狭い部屋に戻るのが嫌で

リビングにタオルケットを持ってきてソファで寝ることにした。安くて無理に合皮を使った白いソファが身体に冷たかった。

そのうちに生ぬるい水のような温度に変わるのだろう。

そう思っただけで、瞼が落ちた。

ぐらぐらと揺らされて、崖に落ちそうになる夢で目が覚めた。
唸って、大してむくんで開かない目を開けた。

「お前、超不細工だぞ。大丈夫か？」

朝から鈴にそんな事を言われると思わず、ため息が漏れた。
こんな馬鹿みたいな言葉を聴くと、本当はやっぱりいろんなことが
うそじゃないのかなと思うときがある。

「おはよう、愛名」

「お、はよう里奈」

酒やけでかすれ始めた声を無理に出した。

その声にビックリしたのか、里奈がおちゃとか持ってこようかと聞
いてくれた。

「里奈は、いいから、鈴もって、こい」

そういうと鈴は少し嫌そうに顔をしかめた後里奈を起きた私の隣に
座らせた。

「ほいほい、お茶ないからサイダーとかでいいか？」

酒やけにサイダー最低ね。そう思いつつ声には出さずにつなずいた。

喉には最悪そうで、でもさっぱりと喉を降りていくサイダーを飲んでコップに少し残ったサイダーの泡がとても綺麗に見えた。
今日は声があまり出そうにない。

メールで店長にメールをして、声が出ないので行かないと伝えた。
無断で休んだわけじゃないから、罰金はないだろう。

「今日出かけるから」

そうとぼけた顔で鈴は言う、そうと目だけで鈴に合図をした。

「後で、お前も少し寝るか、のど飴かってこいよ。里奈も連れてくから」

いつてらっしゃいと声を出さないまま喋った。

隣で、やばいよその声と里奈がくすくすと笑った。

私もかすれた声でくすつと笑った。この一瞬がとても愛しく思った。

化粧道具を持ってくる里奈に、私の化粧道具も貸した。

いいのと聞いてくる里奈にいいから使いなとわずいて見せた。

笑った顔が痩せていくけれど可愛い子供のように里奈が見えた。

鈴は着替えてくると言って部屋に戻っていった。

服装はそこらへんに居る普通のジーンズにTシャツ。

2人は少し手をつないで玄関から消えて行った

黒いドアは何かを遮断するみたいに別世界になっていまう。
別世界に行く音はガチャリと閉まる音。

またソファアに埋もれてただ白い空間の空を見上げて、眠った。
冷たい合皮が肌に気持ち良かった。

ガチャリとまたこちらの世界にやってくる音に目が覚めた。
ただいまゝとのんきな2人の声がする。
左指にはシルバーの青みがかかった指輪。

それをぼんやり見た。

2人のお揃い。

鈴が口を開いた。

「今日婚姻届出した。」

「2人ともおめでとう。」

正しいという事は分らない。

ただそれだけ言って、飲み忘れのサイダーを飲んだ、もう気の抜けた砂糖水。

お祝いだからと言って

私はコンビニに何か買ってくると話してうちを抜け出した。

ねえ、愛ってなんだろう。私はまだ子供で分らない。
恋から愛になるってどういう事なのかも私にはよく分らない。
愛ってどういう形の物が愛なのか私にはまだ分らない。
だから走ってコンビニに向かった。

もし里奈が先に死んだら、鈴はどう生きてくんだろう。

残されるってどういう事なんだろう。

恋ではないって里奈はどう思ったんだろう。

ただ走ってコンビニに向かい、お酒とジュースとケーキを買って今度はゆっくりうちに向かった。

どの形もどの生き方も正しくはないのに、いつも私は正しいってことを求めている。

昔必死に覚えた数学の方程式みたいに、必死に正しい形に当てはめようと思ってしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3219c/>

クラゲと、空と青空と。

2011年10月21日03時03分発行